

左思と詠史詩

興膳宏

愛知教育大學

一 序 説

西晉の詩人左思、字は太沖、の詩は、我々の見うる限りでは決して多いとはいえない。文選が収める詠史八首（卷二十二）、招隱詩二首（卷二十二）、雜詩一首（卷二十九）、玉臺新詠に見える嬌女詩一首（卷二）等の比較的よく知られている作品を除けば、わずかに四言の悼離贈妹二首（藝文類聚卷二十九）が姿をとどめるにすぎない。不完全な斷片として残る詩にしても、北堂書鈔卷百十九武功部禦邊の項が引く詠史詩の逸句四句のみが私の知る唯一のものである。①試みに梁の鍾嶸の詩品が「三張二陸兩潘一左」と羅列する西晉の詩人について、丁福保の「全漢三國晉南北朝詩」によりながら作品數を比較してみると、張載十五首、張協十

左思と詠史詩（興膳）

三首、陸機百四首、陸雲三十三首、潘岳十八首、潘尼二十四首、左思十五首（逸句を含む）ということになり、一見して明らか通り、左思は作品の少ない詩人の側に屬している。もちろん彼の名聲は賦のジャンルにおける畢生の大作三都賦に負うところが大きいが、詩以外の分野を考慮に入れるにしても、作品の數の面で陸機や潘岳から隔たること遙かなのである。隋書經籍志は「晉齊王府記室左思集二卷（梁有五卷・錄一卷）」とする。因みに陸機の集は十四卷（梁四十七卷・錄一卷）、潘岳のそれは十卷である。少ないのはどうやら現存する作品だけではないらしい。察するに左思はもともと寡作な詩人だったのである。彼は十年の歲月を費やして三都賦を完成したといわれるが、文心雕龍神思篇は「左思は都を鍊るに一紀を以てす」と彼を歴代遲筆の一人に數えて、「巨文有りと雖も、亦た思の緩なり」と評する。恐らく彼は努力型の誠實な作家だったのであり、才氣煥發型の器用な詩人ではなかつたであろう。

かくの通りあまり多いとはいえぬ左思の詩に、美文の時代にふさわしいきらびやかな技巧を見てとろうとする人が

あるなら、その期待は裏切られるよりほかあるまい。練り上げられた雕琢の美、複雑な對句構成など、彼の詩にはおよそ縁遠いものだからである。含蓄を重んじて感情の餘韻に低徊するようなところもほとんどない。彼の表現はあくまで明快・直截なのである。

衣を千仞の崗おかに振り

足を萬里の流れに濯あらう

(詠史第五首)

必らずしも絲と竹とに非ず

山水 清音有り

(招隱詩第一首)

古今を通じて人口に膾炙されるこれらの句は、いずれも振幅の大きい斷定の口吻であり、一度出會つたら忘れられぬ強い印象を焼きつけずにはおかぬが、決して技巧に走つた表現とはいえない。ことに前者における「千仞」と「萬里」の對などは、文心雕龍のいわゆる「言對」であり、賦にはよく見られる常套的な修辭である。左思の吳都賦から一、二例を拾うと、

擢本千尋

本を千尋ちゆんに擢ひきて

垂蔭萬畝

蔭を萬畝ばんこに垂る

所以經始用累千祀

經始きやうしして用て千祀せんしを累かさぬる所以

.....

所以跨時煥炳萬里

跨こし時じして萬里ばんりに煥炳くわんぺいたる所以な

文心雕龍麗辭篇によれば、對句には言對、事對、反對、正對の四種類があり、そのうち言對とは「空辭を雙比なべる者」、つまり形式的なにおいの強い對句を指し、例として司相馬如の上林賦の「脩容乎禮園、翺翔乎書圃」があげられている。文心雕龍の分類が賦のすべてのケースを適確に盡くしえているとはいえないまでも、凡そ詩におけると賦におけるとを問わず、對句という修辭がどちらかといえればホリゾンタルな局面において言葉の平衡を保とうとする衝動に働きかけられやすいことは事實であろうし、その極、對句は往々にして内容の面では空虚な形骸だけの存在に墮

しかねない。その意味では、劉勰が「凡そ辭を胸臆に偶するは、言對の易しと爲す所以なり」というのも容易に首肯され得ることであろう。

では上にあげた左思の對句が、一見したところ平凡なただの「言對」であるかに見えながら、無量の感動を人の心に呼びおこすのはなぜだろうか。それは恐らく、借りものでない彼の心の眞底からほとばしり出る慷慨が、「言對」という柔軟性に乏しい狹隘なわくを一舉に破壊して突き抜けてゆくとときの強いエネルギーによる。形式・修辭の面というなら、左思はむしろ野暮な詩人ですらある。陸機は左思が三都賦の創作を志していることを耳にして、手を打つて大笑いし、「これが完成したら、酒がめのふたにでもなるだろうて」と悪口をあびせかけたという。しかし左思は野暮であることを放棄しようとしなない。それどころか剛情に野暮を貫こうとする、野暮であることに居直つて、そこに彼の強烈な個性をぶつつけようとする。小手先の技巧などはそのときどこかへ吹つ飛んでしまうのだ。

鬱鬱澗底松 鬱鬱たる澗底の松

左思と詠史詩（興膳）

離離山上苗 離離たる山上の苗
以彼徑寸莖 彼の徑寸の莖を以て
蔭此百尺條 此の百尺の條を蔭す

（詠史第二首）

門閥社會の不條理を象徴する警拔なこの發想も、一つの句に分解してみれば、何らの粉飾も認められぬ平凡な單語の連なりにすぎない。門閥社會のメタファーとして印象的な最初の對句も、もし賦の中の一景として位置づけられれば、月並な自然描寫の「言對」として終るべき運命にあつたかもしれないのである。

梗枿幽藹於谷底 梗枿は谷底に幽藹たり

松柏翁鬱於山峯 松柏は山峯に翁鬱たり

（蜀都賦）

單なる修辭の問題として取りあげるなら、詠史詩の例の二句とこの蜀都賦の中の對句との間にどれだけの距離があるといえようか。左思の對句構成に見られるこうした特徴は、彼と全く異質の詩人である潘岳との比較によつていつそう明らかになる。

濫泉龍鱗瀾

濫泉は龍の鱗のごとく瀾なだち

激波連珠揮

激波は連なれる珠のごとく揮う

(金谷集作詩)

春風緣隙來

春風は隙すきまに縁よりて來り

晨靄承檐滴

晨靄は檐のきを承うけて滴したる

(悼亡詩第一首)

いづれも「言對」でありながら、左思のそれとは全く趣きを異にする。潘岳はあたかも金銀の箔をたんねんにはりつけるように、文字の可能性の限界をさぐりながら文章の美を組み立ててゆく。それはちようど文心雕龍がいう「言對の美を爲すや、貴は精巧に在り」の方向を充足するものにほかならぬ。ところが左思の方は「貴は精巧に在り」などというにおよそ不得手な人である。せいぜい華やかな對句を工夫しようとしても、

白雪停陰岡

白雪は陰岡に停まり

丹葩曜陽林

丹葩は陽林ががに曜く

(招隱詩第一首)

のように黒と白とがあまりにもはつきり出すでしようのだ。詩品が左思の詩を「陸機より野なりといえども、潘岳より深し」とする評價に、陳祚明や沈德潛といった後世の批評家はおおむね否定的であるが、鍾嶸の評が客觀的に見て妥當か否かはしばらく置き、「野」という評價には左思自身苦笑しながらうなずいていそうな氣が私にはする。

『野』であつてもよい」と彼はいうだろう。「空しいきれいことよりはむしろ『野』である方がよい。私は『野』に徹しながら、私の全身の激動をいかにすれば讀者自身の激動として傳え得るかに腐心しているのだ。」

左思の詩の特質は常に強い自己主張に貫かれている點にある。「上品に寒門なく、下品に勢族なし」といわれた西晉の門閥貴族制社會、寒士の家に生まれた彼は、彼を埋没させ時代に同化させようとする狂暴な時代の壓力に對して、勝ち目のない抵抗を續けねばならなかつた。埋没させられるべきでない、絶対に埋没させられたくない自己がそこにはあるのだ。そしてその抵抗がどうにもならぬ厚い壁にはばまれていることを知らされるとき、彼は時代を呪詛する。

左思と同じ境遇にあり、同じ苦悶を抱き、同じ絶望に陥つた人は無数に存在したに違いない。しかし彼と同じように時代への呪詛をたたきつけた人は決して多くないのだ。作家は常に何らかの形で彼の生きる時代の現實を反映するとはいつても、反映の方法はむろん多様である。絶望は飲酒の中で沈澱させることも、老莊の中で屈折させることも、仙藥の中で解放することも可能であつたし、絶望した自己を脱け出して姑息な現實妥協に低徊することも可能であつた。左思の同時代人の中にそのような人物を見出すのに、私たちはさして苦勞を要さないであろう。左思にはそうした利巧さがないのである。彼は受けとめた現實を、誠實な感受性を通して、激しい慷慨の文學として吐露した。いわば全身で書いた文學というべきかもしれない。

詩品はまた左思について「文は典にして、以て怨み、頗る精切を爲し、諷諭の致を得たり」と批評する。「典」とは古典の教養に富みまた古典的な作風をもつことを意味することであり、この評價の正しさは以下の論述によつて證明されるであろう。詠史詩こそは、彼が古典の教養を縦横

に生かしながら、「怨」すなわち慷慨の感情を吐露した代表作である。「怨」とは、毛詩大序に「亂世の音は怨みて以て怒り、其の政まつことは乖たがう」とあるように、政治・社會に對する慷慨を指すことばであろう。だが彼が古典に依據する度合いの大きいことは、同時に彼の創造力が古典に制約を受けることの大きさでもあり、溢れるような自由奔放さの少なさでもあつたといえる。海の如き陸機、江の如き潘岳と比較して、左思は少なくとも言語表現の豊富さ・多様さにおいて一步を譲るとしなければなるまい。

こうしたタイプの詩人に、器用さはむしろ無用であろう。左思は言葉の能力を美しさの側から探らない。言葉はいつたいどこまで強くなれるものなのか、その可能性を追求するのである。彼が全身をぶつつけて表現と取り組むとき、言葉には忽ち太い骨格が備わってくる。何の變哲もなささうな對句が異常なまでのエネルギーにはちぎれそうになる。文學的技巧などというケチな次元で批評家のさかしらを許さぬ厳しさが迫ってくる。陳祚明は左思の詩のこうした特異性を、警拔な比喻を借りて説明している。「左太沖の詩

は、裴將軍の劔を舞わすが如し。運用は手に在り、高下は心に在り。捷疾變宕、測り識るべからず。懦夫は之が爲に膽張り、常人は之が爲に目眩む。其の神明を傾吐し、擊刺の法に熟するを知らざればなり。」〔采菽堂古詩選〕卷十一〕

批評家たちから「古今の絶唱」「千秋の絶唱」と激賞される詠史詩八首は、左思の文學の代表作である。數の上で全作品中に大きな位置を占めるからではもちろんない。あらましこれまで述べてきたような意味で、最も左思らしい特色にあふれる作品だからこそである。

二 詠史詩の源流

左思の詠史詩は、歴史上の人物のイメージを借りながら、左思自身の思想・感情を展開する作品であり、そこには誰からの借り物でもない強い個性が横溢している。その意味では、これから私が試みる詠史詩を彼以前の時代からの特定の作品系列に組み入れて考察しようとする努力は無駄であり、的はずれであろう。しかし、歴史を詩の中で取り上げることは彼の先輩たちがしばしば繰り返してきた試みて

あり、左思の發想のヒントがそれらの間から誕生したということは當然考えてかからねばならぬ。またそれら先輩たちの側からの光の中で、左思の詩の個性がいつそう鮮明に把握され得るであろうことも豫想しておかねばならぬ。いまここで私たちが左思以前の時代にさかのぼるのは、あくまでも彼の文學を考察するための準備であり、決して知的興味による道草ではないことを斷わつておこう。

「詠史」の題を持つ最も古い詩は、明の馮惟訥（ふういねつ）の古詩紀が收める後漢の班固の作品であり、前漢文帝の時代、名醫として有名な淳于意が罪を得て肉刑を加えられようとしたとき、末の娘の緹縈（ていえい）が父とともに都に出、帝に上書して父の罪を許され、またそれを機に肉刑の法が廢止されたという説話をそのテーマとする。（この話は史記扁鵲倉公列傳、漢書刑法志、劉向の列女傳などに見える。）

三王德彌薄 三王は德彌（い）よ薄く

惟後用肉刑 惟の後肉刑を用う

太倉令有罪 太倉の令 罪有りて

就遠長安城 遠（とち）われに長安城に就く

自恨身無子 自ら身に子無きを恨み

困急獨煢煢 困急して獨り煢煢たり

小女痛父言 小女 父の言を痛む

死者不可生 死者 生く可からずと

上書詣闕下 上書して闕下に詣り

思古歌鷄鳴 古えを思いて鷄鳴を歌う

憂心摧折裂 憂心 摧け折れて裂け

晨風揚激聲 晨風 激聲を揚ぐ

聖漢孝文帝 聖漢孝文帝

惻然感至情 惻然として至情に感ず

百男何憤憤 百男何ぞ憤憤たる

不如一緹縈 一緹縈に如かず

一見して明らかかな通り、詩は原話の筋の進行に忠實に従いつつ展開されており、班固が漢書刑法志の中に自ら記した説話を、もう一度韻文に直してみせたという感じさえする。班固は恐らくこの一首の中に、時の過酷な刑罰に對する諷諭を籠めているのであろうが、それはあくまで隱微な底流として感知されるにとどまり、彼の自己主張が露わに

示されることはない。

班固の詠史詩については、鍾嶸の詩品が「東京二百載の中、惟だ班固の詠史有るも、質木にして文無し」(序)といひ、また「孟堅は才流にして、掌故に老く。其の詠史を觀るに、感嘆の詞有り」(下品)というのが最初の論及であるが、彼の「詠史」なる詩が先に引用した一首だけにとどまらなかつたことは、すでに吉川幸次郎博士がいくつかの逸詩を引きつつ證明された。(「神田博士還曆記念書誌學論集」、一九五七)博士によれば、班固の詠史詩は「孝女緹縈のみならず、延陵の季子、秋胡、霍去病など、顯著な人物についての物語を歌つた、何首かの五言の連作であつた」。なお、詠史詩の題こそないが、曹植の樂府「精微篇」の第二章でも、緹縈の故事が物語性を濃く殘しながら歌われていることを付け加えておく。^④

降つて建安時代に至ると、私たちはさらに數人の詩人の詠史詩を目にすることができる。まず建安七子の一人王粲の作品は、秦の穆公に殉死した子車氏の三人の子、奄息、仲行、鍼虎、いわゆる三良の故事を歌うものである。

自古無殉死

古え自り死に殉うこと無きは

達人共所知

達人の共に知る所なり

秦穆殺三良

秦穆 三良を殺せり

惜哉空爾爲

惜しいかな空しく爾爲せること

結髮事明君

結髮 明君に事え

受恩良不替

恩を受くること良に替られず

臨沒要之死

没するに臨んで死に之らんことを要む

焉得不相隨

焉んぞ相い隨わざるを得ん

妻子當門泣

妻子は門に當つて泣き

兄弟哭路垂

兄弟は路の垂に哭す

臨穴呼蒼天

穴に臨んで蒼天を呼べば

涕下如纒縻

涕下ること纒縻の如し

人生各有志

人生まれて各の志有るも

終不爲此移

終に此が爲に移らず

同知埋身劇

ともに身を埋むるの劇しきを知るも

心亦有所施

心に亦た施わんとする所有り

生爲百夫雄

生きては百夫の雄と爲り

死爲壯士規

死しては壯士の規と爲る

黃鳥作悲詩

黃鳥は悲詩を作り

至今聲不虧

今に至るも聲虧させず

この詩の構想はいうまでもなく詩經秦風の黃鳥一篇の影響下にあり、具體的な語彙の面でも、「臨穴呼蒼天」が黃鳥の「臨其穴、孺孺其慄」「彼蒼者天、殲我良人」に、「生爲百夫雄」が同じく「維此奄息（奄息は二・三章では仲行・鍼虎）、百夫之特（特は二・三章では防・禦）」を直接に意識することは、李善の注が指摘する通りである。また五臣の一人呂向は、この詩の創作された動機を次のように説く。「曹公は好んで己が事を以て賢良を誅殺す。桀は故に言を秦穆公の三良を殺して自らに殉わしむるに託し、以て之を諷す」つまり、王桀は三良の故事を借りて時事を諷したというのであり、單なる古物語への詠歎のみが結晶した詩ではないとするのである。

ところで、文選卷二十一の詠史の部には、さきの王桀の詩に續いて、曹植の三良詩一首を収めている。「功名は爲す可からず、忠義は我の安んずる所なり」にはじまり、「黃鳥は爲に悲鳴し、哀しい哉肺肝を傷る」に終る詩であ

るが、穆公の無道を憤りつつ三良への憧憬を寄せる主題も、故事の處理のしかたも、王祭の作に著しく近似している。劉良の注に従えば、この詩は曹植が父の武帝の死に隨うことができなかつたのを悔やんでの作であるという。とすれば建安二十五年（二二〇）ごろに作られたことになる。ところがこれには異説があり、朱緒曾の「曹集考異」は、建安二十年（二一五）曹植が張魯征討に従軍して秦の穆公の墓を通り、王祭と同時に作つたものだと言張している。臆測するに、朱緒曾の説の生まれた根據は、王祭と曹植の作品が内容の面でもあまりにも共通する點の多いことにあるのではないか。つまりこの二作は制作の動機・場所・時間・心的状態などを共有する作品と見なしたのである。だが曹植の詩の制作時期を五臣注に従つて建安二十五年にすれば、このときすでに王祭は鬼籍に入つてゐる。（建安二十二年死）そこで朱緒曾は建安二十一年以前の時期の間から、二人が三良を歌う必然的な動機が存在しうる年を選んだものと考へられる。この二作を同時期・同地點での作とする考え方に、私は基本的には賛成である。

左思と詠史詩（興膳）

王祭と曹植の前記二作はよく知られた作品だけに、しばしば論者の比較の對象となつてゐるが、私たちは實はここにもう一つやはり三良の故事を主題とした詠史詩の存在することを知らねばならぬ。それは王祭と同じく建安七子の一人である阮瑀の作品である。（藝文類聚卷五十五史傳引）

誤哉秦穆公 誤まれる哉秦の穆公

身没從三良 身は没して三良を従う

忠臣不違命 忠臣 命に違わず

隨軀就死亡 軀を隨えて死亡に就く

低頭闕墮戸 頭を低れて墮の戸を闕い

仰視日月光 仰いで日月の光を視る

誰謂此何處 誰か謂う此は何處ぞと

恩義不可忘 恩義 忘る可からず

路人爲流涕 路人 爲に涕を流し

黃鳥鳴高桑 黃鳥 高桑に鳴く

前二作より短くはあるが、主題においてさしたる差異は認められない。結論を急げば、この一首もまた王祭・曹植の作品と時・所・心的状態を共有するものと考えることが

可能であろう。假りにそうだとすれば、阮瑀は建安十七年（二二二）、つまり王粲に先立つこと五年前に亡くなつてゐるから、王粲・曹植の詩の制作時機は、朱緒曾の建安二十年説よりさらに繰り上げねばならぬことになる。劉良や朱緒曾の説に確固たる歴史的必然性が認められぬ以上、この推測もかなりの存在意義を認められることはできるのである。もつとも、曹植と阮瑀の結びつきがどれほどのものであつたかについては疑問を残すが、建安文學は多く曹氏兄弟を中心とする同志的雰圍氣の間から生まれた。個々の詩人の作品は、目に見えぬ絆によつて強い連帶感を保つてゐる。この三良の故事を主題とする詠史詩も、こうした連帶の意識が生んだ一種の「三つ子」だつたのではあるまいか。いわば心的状態 (climax) を共有する題詠詩とでも名づけるべきものである。

さらに内容の面で三者を論ずるなら、三良の故事に對するアクセントは、いずれも秦の穆公の無道を非難する側にあるよりは、三良の類い稀な自己犠牲に感動を注ぐ側にある。殉死という最も非人間的な限界狀況に敢えて身を投ず

ることによつて守り抜かれた忠節への賛歎と同時に、かかる悲劇的な結末においてしかそれが果され得なかつたことへの限りない悲しみが漂つてゐる。もちろんこれは殉死賛美という安易なヒロイズムに結びつくのではなく、自己を犠牲とすることさえいとわぬ臣下の獻身をあだ花に終らせてもらいたくない、眞に意義ある方向においてこそ生かすべきであるという君主への要望を裏付けとして持つてゐよう。ここには、曹植の責躬詩、應詔詩、同じく表等に見られるあのひたむきに自己の忠誠を披瀝すると同時に、幼兒が親の庇護を求めるかの如く君主の信頼を願つてやまぬ心情の動きをも見出すことができる。

因みに阮瑀のもう一首の詠史詩（藝文類聚卷五十五史傳部引）は、「燕丹は勇士を養ひ、荆軻は上賓と爲る」に始まる荆軻の物語に取材した作品であるが、「士は己れを知る者の爲に死し、女は己れを説ぶ者の爲に容る」（史記刺客列傳）という道理を體現した逸話として荆軻の物語が考えられていたとするならば、「臣下の忠誠というテーマ」は先の三良の場合と基本的には同一の源に歸着するものと見

なされてよかろう。^⑥

要するに王粲・曹植・阮瑀三人の以上のような心的状態の共有関係の上から彼等の詠史詩は生まれている。したがって三首の三良の詩を比較するとき、共通面のみが鮮明であり、三人三様の個性はむしろ影をひそめてしまつているのも致し方ないこととせねばならぬ。

左思の先輩詩人の中で「詠史詩」の作を残すのは資料の存する限りでは上の人々にとどまる。しかし私たちは「詠史」という詩題のみに目を奪われるのではなく、いまましろ視野を廣げて、歴史上の人物あるいは故事が詩中でどのように扱われてきたかについて考察を致す必要があるだろう。後漢末の詩人についてみると、私たちはすでに史上有名な人物が詩中に現われるのを観察することができる。

陳平放里社 陳平は里社に敖^をび

韓信釣河曲 韓信は河曲に釣る

終居天下宰 終に天下の宰に居り

食此萬鍾祿 此の萬鍾の祿を食む

德音流千載 德音 千載に流れ

左思と詠史詩（輿騰）

功名重山嶽 功名 山嶽よりも重し

（酈炎の「見志詩」から）

この詩では冒頭から陳平・韓信のことが歌われるのではなく、また彼等の事蹟がテーマになつてゐるわけでもない。要は引用部分の直前にある「通塞は苟しくも己れに由れば、志士は相いとせず」という作者の人生觀をより具象化する存在として、二人の古人が引きあいに出されたまてなのである。「人の運命は自分自身のあり方によつて左右されるものなのだから、いやしくも堂々たる男子たるもの、先のことをあれこれと思わずらつてもはじまるまい。陳平や韓信の無名の貧乏時代だつてそうだつたじやないか」——論旨の脈絡はおよそこのような形で通つてゐる。これは前に述べた一連の詠史詩が一つの故事をそつくり一首のテーマに据える態度とは明らかに異質のものである。班固・王粲らの詠史詩では故事を歌うこと自體が一つの大きな目的でありえたのに對し、酈炎の詩では、故事あるいは歴史人物は一つの道具だてとしての價值を有するにすぎない。このような方において歴史人物のイメージが遇され

る詩は、時が三國に移つて詩人の數も作品數も飛躍的な増加を示すようになるとともに、いつそう顯著に私たちの前に現われてくる。私の觀察によれば、こうした手法はことに曹氏父子の作品の中で著しい傾向をなすように感じられる。例えば曹植の豫章行第一首は次のように展開される。

窮達難豫圖 窮達は豫め圖り難く

禍福信亦然 禍福も信に亦た然り

虞舜不逢堯 虞舜も堯に逢わざれば

耕耘處中田 耕耘して中田に處らば

太公不遭文 太公も文(王)に遭わざれば

漁釣終渭川 漁釣して渭川に終らん

不見魯孔丘 見ずや魯の孔丘

窮困陳蔡間 陳蔡の間に窮困す

周公下白屋 周公は白屋(の土)に下り

天下稱其賢 天下 其の賢を稱す

この詩の主題はつまるところ最初の二句「窮達難豫圖、禍福信亦然」に集約されているといつてよい。そして堯・舜をはじめとする歴史人物は、曹植の腦裏にあるこの命題

を普遍化し客觀化する演繹の過程に必要な因數なのである。これに引き續く第二首でも、「他人は盟を同じうすと雖も、骨肉は天性より然り」という主題を、周公・康叔・管蔡・子臧・季札等の人物によつて具象化し肉づけしてゆく方法が用いられている。その他故事・人物の用い方の多少により程度の差はあるが、薤露篇、丹霞蔽日行、怨歌行、靈芝篇、精微篇などにおいても同様の手法を見ることができ。曹植の父曹操、兄曹丕の詩でもこうした趣きの句を拾うことはさして困難でないが、今は曹丕の折楊柳行第三章を例としてあげることしよう。

彭祖稱七百 彭祖は七百と稱するも

悠悠安可原 悠悠 安んぞ原ぬ可けんや

老聃適西戎 老聃は西戎に適きしも

于今竟不還 今に于て竟に還らず

王喬假虛辭 王喬は虚辭を假り

赤松垂空言 赤松は空言を垂る

この章で展開されるのは、不死あるいは登仙が人間の営みとしては不可能な到底達することのできぬ境地であるこ

とについての主張である。彭祖・老聃は俗説によれば奇跡的な長壽を保つて、この世界のどこかに生きていたはずなのだが、しかし実際には誰もそれを見とどけた者はない。

散文的に論旨を敷衍するなら、「此の人何くにか在らん、目未まだ之を見ず。此れ殆んど影響の論にして、言う可くして得可からず」(向秀「難養生論」)とでもいうところであ

ろうか。同様な手法で歴史人物が題材となつてゐる詩には、曹操の度關山、薤露、短歌行、善哉行、曹丕の煌煌京洛行などがあげられる。陳祚明が左思の詠史詩の「原は魏武に出ず」(「采菽堂古詩選」卷十一)と言及したときも、恐らくこの系列の作品が意識に上つていたのである。

さて、ここでもう一度これまで述べてきた曹氏父子の詩句を振り返つてみると、私たちはそこに見逃すことのできな大きな特色が嚴然と存在することに氣づく。つまり歴史人物・故事が題材とされる詩は、ここに引いた限りではすべて樂府の詩である點である。斷つておくが、これは決して私の恣意なたくらみのせいではなく、事實上かかる傾向の詩は樂府に集中してゐるのだ。ほとんど全作品が樂府

體の詩である曹操・曹丕については假りに斟酌の餘地があるとしても、曹植の樂府以外の詩で上の條件を満足させるものは寥々數篇のみであり、それも例え

思慕延陵子 延陵子を思慕し

寶劍非所惜 寶劍は惜しむ所に非ず

(贈丁義)

のように、單なる比喻としてあらわれるだけで、思想の展開過程における因數の役割はもたないのである。この現象はいつたいていどう説明すればよいのだろうか。

概括的にいつて、ここに名を列ねた曹氏父子の樂府が追求する命題は、個人的・具體的なものであるよりは、むしろ廣く人間一般の問題として延長し得る普遍的・抽象的な性格を持つ場合が多い。曹植の豫章行第一首の主題は、人間の運命はしばしば偶然性によつて支配されるということであり、第二首のそれは、肉親はこの世界で本來最も信頼し合うべきはずのものだということである。この詩の中に當時曹植の置かれた環境の支配下にある個人的感慨のうかがえるのはもちろんだが、人間一般の命題をはらむ發想態

度はやはり確固として存在している。次いで曹丕の折楊柳行は、神仙の存在に對する疑惑の念を述べたものであり、關心はやはり人間一般の運命の上に廣がるべきものにほかならぬ。そして、かかる命題は具象的・日常的の世界におけるイメージの中で追求されるよりは、抽象的な思辯の次元において展開される。歴史人物たちはまさにこうした次元において、作者の演出に従いつつ彼らに與えられた演技を繰り廣げてみせるのである。

抽象的思辯の次元で歴史人物たちの見せる演技は、先秦からこの時代に至る文學全般を俯瞰するとき、詩におけるよりも散文においていつそう顯著である。三國の散文から一例を引けば嵇康の「養生論」に對する向秀の駁論「難養生論」では、養生の可能性を否定して次のように言う。

「若し性命は巧拙を以て長短と爲さば、聖人は理を窮め性を盡くす、宜しく遐かなる期を享くべし。而るに堯・舜・禹・湯・文・武・周公は、上は百年を獲、下なる者は七十なり。豈に復た導養に疏からんや。」

これに對して嵇康は次のように答えている。

「論を案ずるに、堯・孔は命を棄くること限り有り」と雖も、故より導養して以て其の壽を盡くす。此れ則ち理を窮めしことの致せるものにして、養生せずして百年を得たりとは爲さざるなり。且つ仲尼は理を窮め性を盡くして、以て七十に至り、田父は六弊の蠢愚を以て、百二十なる者有り。若し仲尼の至妙を以て、田父の至拙に資せしむれば、千歳の論も奚ぞ怪しむ所ならんや。」

向秀は養生の不可能を論ずるに際して、堯舜以下の聖人を列擧し、「このような聖人にだつてそれは不可能だつたじやないか」と根據を提出したのであり、この素朴な實證的態度は議論をいたずらな空論に終らせぬ爲に効果をあげている。これに對する嵇康の答は、聖人が決して長壽ではなかつたとする向秀の指摘を事實として認めながら、その事實の由つて來たる根源を分析し、分析の結果を再び事實にさし向けて、聖人が長壽を保ち得る蓋然性の大きさを導き出して來るのである。この論争の中で、歴史事實は議論の進展のために缺くべからざるバネとして作用している。すなわち歴史事實は議論に具體性のふくらみをもたらし、

そのふくらみの中から新たな段階での抽象的思辯が胚胎してくるのである。

知識人の世に處する態度を論じた東方朔の「答客難」、揚雄の「解嘲」、班固の「答賓戲」（いずれも文選卷四十五）などでは、春秋戰國時代以來のさまざまな知識人の生き方が考察の対象に取り上げられていることも注意しておく必要がある。

曹植等の抽象的思辯性の濃い樂府の詩に歴史人物がしばしば現われるという事實は、こうした散文における論理構成の問題と恐らく無縁ではあるまい。より古い時代に屬するこの系統の詩として最初にあげた酈炎の作品が「志を見わす詩」であることも、單なる偶然の符合としてはすまされぬ問題ではなからうか。

私たちはまた曹植の一世代後の詩人阮籍・嵇康の詩でも、歴史あるいは傳説中の人物の故事が效果的に用いられているのを見とどけることができる。阮籍の詠懷詩其六では、漢初の東陵侯邵平の故事に寄せて、詩人の胸懷が披瀝される。

左思と詠史詩（輿膳）

昔聞東陵瓜 昔聞く東陵の瓜

近在青門外 近く青門の外に在り

連畛距阡陌 畛を連ねて阡陌に距り

子母相鈎帶 子母 相い鈎帶す

五色曜朝日 五色 朝日に曜ぎ

嘉賓四面會 嘉賓 四面に會す

膏火自煎熬 膏火は自ら煎熬し

多財爲患害 多財は患害を爲す

布衣可終身 布衣もて身を終う可し

寵祿豈足頼 寵祿も豈に頼むに足らんや

邵平の物語が示唆するのは、俗世に對する倦厭の情であり、氣ままな隱者生活への賛美である。阮籍の關心が邵平の物語自體にあるのではなく、この物語を通して彼の心情を述べる點にあることは改めて言を費やすまでもない。その他、ざつと見渡しただけでも、其十三では李斯と蘇秦、二十では楊朱と墨翟、其三十二では齊の景公と孔子、其三十八では莊周、其四十二では四皓と老聃、其六十六には再び邵平、其七十四では甯戚と楊朱らの群像がそれぞれ詩中

に點綴されている。

一方嵇康の詩についてみると、

性不傷物 性は物を傷つけざるに

頻致怨憎 頻りに怨憎を致く

昔慙柳惠 昔 柳、惠に慙じ

今愧孫登 今 孫、登に愧ず

萬石周慎 萬石は周慎にして

安親保榮 親を安んじ榮を保つ

(幽憤詩)

輒軻丁悔吝 輒軻 悔吝に丁り

雅志不得施 雅志も施うるを得ず

耕耨感穽越 耕耨は穽越を感ぜしめ

馬席激張儀 馬席は張儀を激ます

(述志詩第一首)

などの他、六言詩十首の中では堯・舜、東方朔、楚の子文と柳下惠、老萊子の妻、原憲が、答二郭三首では豫讓と聶政、莊周、楊朱が、與阮德如一首では顏淵、隰朋、涓子、

彭祖等がそれぞれ取り上げられている。

かくの如く阮籍・嵇康の作品中に歴史人物・故事が頻用されることは充分注目値する。彼ら二人の詩が形而上的思辯の色を濃厚に持つことについてはしばしば指摘される通りであり、歴史人物・故事の使用は詩中における思辯の形成に重要なモメントをなすからである。阮籍の詠懷詩については、「厥の旨は淵放にして、歸趣求め難し」(詩品)、「志は刺譏に在りと雖も、文に隱避多く、百代の下、情を以て測り難し」(文選李善注)というように古來その晦澁さが問題にされるが、彼は自己の胸懷を故事に託して口ごもつたまま、明確な斷定の口吻を避ける場合がよくある。このとき、歴史人物や故事はいくつかの可能な解釋をはらんだまま讀者の手に委ねられたのである。

後漢末から三國へかけての詩において、歴史人物のイメージが作品の思想性を形成する上で一定の役割を果している事實は重視されてよい。次章で改めて考察する左思の詠史詩を生み出す充分な條件が、彼の先輩詩人たちの手で育であられつつあったことを、私たちははつきり認めておく必

要がある。「詠史詩」なる題の作品が班固や王粲にあるからといって、左思の問題の作品がそれらのみの子孫であると考えるのは、あまりに性急で、近視眼的というものだろう。歴史人物を借りた自己主張の展開という面で、左思はいろいろな詩人の作品から暗示を得ていたに違いない。

三 左思の矜持

左思の詠史詩八首は、次の一首から始まっている。

弱冠弄柔翰 弱冠にして柔翰を弄び

卓犖觀羣書 卓犖として羣書を觀る

著論準過秦 論を著わして過秦に準え

作賦擬子虛 賦を作つて子虛に擬す

邊城苦鳴鏑 邊城 鳴鏑に苦しみ

羽檄飛京都 羽檄 京都に飛ぶ

雖非甲冑士 甲冑の士に非ずと雖も

疇昔覽穰苴 疇昔に穰苴を覽る

長嘯激清風 長嘯して清風に激し

志若無東吳 志は東吳を無みするが若し

左思と詠史詩（興膳）

鉛刀貴一割 鉛刀 一割を貴び

夢想騁良圖 夢想して良圖を騁す

左眄澄江湘 左眄して江湘を澄ませ

右盼定羌胡 右盼して羌胡を定む

功成不受爵 功成つて爵を受けず

長揖歸田廬 長揖して田廬に歸らん

左思はまず冒頭で筆者自らの紹介を始める。「弱冠柔翰を弄び、卓犖として羣書を觀る」自分は青年時代から文章に親しみ、高い志を抱いて學問の道に進んだ。そして自分の作る文章は、漢代最高の文學者たる賈誼や司馬相如の遺風を繼承するものとして、矜持を敢えて隠そうとしなかつた。「論を著わして過秦に準え、賦を作りて子虛に擬す。」この小氣味よい啖呵を聞くがよい。上の四句は後の部分に對していわば序のような關係にあり、さらに連作詩全體の總序ともいうべき役割すら持つているが、讀者は何だか出會いがしらにいきなり横つ面を張られて毒氣を抜かれたような氣分にされてしまう。左思の同時代人なら、たいへんなハッター屋めと舌打ちしたかもしれない。例えば沈約

の宋書謝靈運傳論に「屈平と宋玉は清源を前に導き、賈誼と相如は芳塵を後に振う」とあることなども推測でき、賈誼のように、賈誼と司馬相如といえは、漢代の文學が到達し得た至上の價值として認識する通念が六朝人の意識には備わつていたものと考えておかねばならぬ。この二人の先達に對する世俗の尊敬の念が厚ければ厚いだけ、輕率に自らを彼らに比擬することが讀者にいかなる反應を引き起すかはあまりに明らかであろう。いま一例によつて見れば、「孔璋（陳琳の字）の才を以て辭賦に閑なまわず、而も多く自ら司馬、長卿と風を同じうすと謂おもえるは、譬えば虎を畫きて成らず反つて狗と爲る者なり」（曹植與楊脩書）のように、下手をすれば冷やかしの材料を提供するだけのことになりかねないのである。だが左思の場合は、肩をそびやかしてもつたいらしく豪語する口調が、彼の詩に一種の爽快な切れ味を與えていることに注意せねばならぬ。

詩の後半に眼を轉ずれば、軍人でないといえ兵法の書には充分通じていると胸を張つてみせ、その志は「東吳を無なみするが若ごとく壯大である。當時蜀はすでに滅びて、南

方の吳のみがなお晉の對抗勢力として餘命を保つていた。左思は自分の才能を「鉛刀」に喩える。これは切れ味も鈍く刀質も頑健でない鈍刀である。しかしそれを力いつぱい振りおろせば、利刀には切れぬ大木を眞つ二つにすることだつてできるのでだ。「鉛刀」とは、左思の才能を語ることばとして、けだし言い得て妙である。彼は自分が大手柄をたてる夢想をほしいままに聘せめぐらした後、「功成つて爵を受けず、長揖して田廬に歸らん」と大見得を切つて、おもむろに刀を鞘に納める。よくいえば小氣味よく、悪くいえばぬけぬけとした自信家ぶりである。

比較のために阮籍の詠懷詩を持ち出すと、其十五では自らの少年時代が次のように回想されている。

昔年十四五 昔年は十四五
志尙好書詩 志は尙く書・詩を好めり
被褐懷珠玉 褐を被まて珠玉を懷いだき
顏閔相與期 顏・閔と相あい與よに期す

これらの詩句はまぎれもなく誇らかな自負心の表白である。しかしこの誇りは、決して肯定的に捉えられていない。

むしろ年少の頃の自分を悔い、現在の自分と非連続的なものとする意識に根ざしているのである。

開軒臨四野 軒まどを開けて四野を臨み

登高望所思 高たかねきに登つて思おもう所ところを望む

丘墓蔽山岡 丘墓は山岡を蔽い

萬代同一時 萬代も同じく一時なり

千秋萬歲後 千秋萬歲の後

榮名安所之 榮名は安やすくにかか之の所ところぞ

乃悟羨門子 乃なわち羨門子に悟り

嗷嗷今自嗤 嗷きうきよう嗷として今いま自ら嗤わらう

人間の死という終着點に思おもい到るとき、人生における一切の價值ある存在は色あせて、少年の日の自負心はただ苦い追憶となつて胸臆に沈しづぬする。「嗷嗷として」自嘲する詩人の心に、過去はただ痛ましい虚像を投影するのみである。「憶おもう我れ少壯の時、樂しみ無なきも自みづずと欣豫きんよせり」にはじまる陶淵明の「雜詩其五」も、過去を現在と非連続のものとして觀じ、自意識の内部から悲哀を生なんでいる點で阮籍の方向に通ずるものを持つ。だが左思は違ちがう。彼は

左思と詠史詩（輿騰）

「柔翰を弄なび」「羣書を觀み」た年少時の自己と現在の自己を連續する一線の上に置いて見渡している。そしてその限りに於いて、彼の自意識に悲哀の生ずる余地はないのである。晉書によれば、左思は少年のころ書と音楽を學んだが、ものにならず、父親から「息子はおれの若い時より覺えが悪い」と愚痴をこぼされたことに發奮して學問に勵んだといい、三都賦注が引く臧榮緒の晉書では、「少わかくして博く文史を覽る」という。然らば詠史詩の自負もあながちに誇大な自己宣傳ばかりではなかつたわけである。

いま一つこの詩で言及しておかねばならないのは、司馬相如に對する左思の敬慕が、しばしば揚雄というもう一人の人物の介在を通してなされることである。漢書揚雄傳に「是の時より先、蜀に司馬相如有り、賦を作りて甚だ弘麗くわんれい、温雅なり。雄は心に之を壯とし、賦を作る毎ごとに、常に之に擬して以て式と爲す」とあるように、相如は揚雄が崇敬くわんおくあたわぬ人物であつた。そして詠史詩第四首に見るごとく、左思にとつて揚雄はまた最も敬愛すべき古人の一人だつたのである。「著論準過秦、作賦擬な子虛」の二句が、揚

雄について歌つた第四首の「言論準、宣尼、辭賦擬、相如」二句と全く同じ修辭法によつてゐることも、左思の司馬相如に對する敬慕が揚雄という人物を意識の底に置いた上でのものであることを豫想させるに充分であらう。(揚雄に關しては第四章に改めて説く。)

ところで、この第一首は、また詠史詩の制作年代を考察する上で重要な手がかりを提供している。「志若無東吳」といい、「左眇澄江湘、右盼定羌胡」という句々は、この詩が明らかに太康元年(二八〇)の吳滅亡以前に作られたものであることを物語つてゐるからである。程千帆氏の「左太冲詠史詩三論」(「古典詩歌論叢」所收・一九五四年・上海文藝聯合出版社)は、晉書武帝紀咸寧五年(二七九)十一月の項に「大舉して吳を伐つ」とあり、またその詔に「吳賊は信を失し、比りに王略を犯す。胡虜狡動し、邊垂を寇害す。……今孫皓境を犯し、夷虜邊を擾すは、此れ乃ちわち祖考の遺慮にして、朕が身の大恥なり。故に甲を繕い兵を修め、大いに戎政を興す。内外心を勞し、上下力を戮せて、以て南は句吳を夷げ、北は戎狄を威す」とある

記述が詩の内容と符合することを論據に、この詩の制作時期を伐吳詔と相い前後する時に推定している。これはかなりの説得力を持つ説であるが、ただし伐吳詔の内容と符節を合するからといつて、詩の制作時期を直ちに咸寧五年十一月という狭い範圍に限定することはやはり危険を含むであらう。吳の滅亡前の二三年間というゆるやかな時期の設定の方が、常識的ではあるにしろ穩やかではなからうか。

左思は妹の左棻が武帝の後宮に入つて修儀となつた泰始八年(二七二)以後、居を洛陽に移したというから、この詩は京師への移住後五年ないし七年のころ、營々孜々として三都賦の構想に熱中していた時期の作とみられる。なお他の七首が同一時期の作かどうかはもちろん定かでないが、思想の面で八首の間に相當大きな振幅のある點からみれば、恐らく一時期に集中的に作られたものではなく、第一首の後の數年間にわたる作品とみるのが一應妥當であらう。この誇らかな自己主張の詩が最初に置かれ、八首の最後に暗澹たる絶望の詩が置かれるのはもとより意圖あつてのことには違ひない。

左思は第一首の中で、自分が文武の才略にたけた有能な人物であることを自信にあふれる口吻で讀者に訴えかけた。自己主張の要素の多い點でこれに似る第三首は、自己の能力の誇示よりは自己の廉潔な志操を説き明かすことに多くの力が傾注されている。

吾希段干木

吾は希う 段干木の

偃息藩魏君

偃息して魏君を藩りしを

吾慕魯仲連

吾は慕う 魯仲連の

談笑却秦軍

談笑して秦軍を却けしを

當世貴不羈

當世 不羈を貴び

遭難能解紛

難に遭いては能く紛を解く

功成恥受賞

功成つて賞を受くるを恥じ

高節卓不羣

高節 卓として羣せず

臨組不肯綈

組に臨んで綈がるを肯んぜず

對珪寧肯分

珪に對いて寧ぞ肯て分けんや

連璽耀前庭

連璽 前庭に耀くも

比之猶浮雲

之を比ぶること猶お浮雲のごとし

ここにも左思が敬慕の對象とする二人の古人が登場する。

左思と詠史詩（興膳）

その名は段干木と魯仲連。賢者の譽れ高い段干木が魏の文侯の顧問となつていと聞いただけで、秦の軍隊は魏の侵略を思いとどまり、趙國に秦への屈從外交を勸告に來た魏の使者は、魯仲連を一目見るやそこそこに逃げ出し、さしもの侵略者秦軍も何らなすところなく退散した。「偃息」はもちろん寢そべること、「談笑」は「(優孟は)多辯にして、常に談笑を以て飄諫す」(史記滑稽列傳)や「(枚臯は)經術に通ぜず、談笑は俳優に類す」(漢書枚臯傳)等の使用例からすれば、諧謔的言辭をあやつることである。慌てず騒がずツボを心得て、機知とユーモアを働かせる曾呂利新左衛門のでんであろうか。

この二人の賢者は國難に際會してもなお悠揚迫らず對處し、大いなる徳の力によつて外敵を排除したあげく、褒賞の山をあたたかも塵芥同然に捨て去つて飄然と去つて行く。

第一首で「功成不受爵、長揖歸田廬」と自らの節操の高さを誇つた左思は、ここで再び敬愛する二人の古人に託して彼の理想とする處世を語つてみせたのである。

細心にこの詩に對するとき、私たちは第一首後半での主

張がそのままここに繰り返されている事實に氣づく。彼が夢想のうちに聘せた「良圖」とは、つまり段干木・魯仲連のごとく行動して、「東吳」「羌胡」を平定することであり、しかもいさおしを建てた後は彼ら二人にならつて、身に一物を帯びず、全ての名譽を放擲して野に退こうというのではなかつたか。因みに「功成恥受賞」(李善は恥を不に作る)は第一首の「功成不受爵」をそのまま繰り返した句にほかならぬ。いつの世も名譽と利慾の亡者にはこと缺かぬのが習いである。ろくな戦果もあげ得ぬくせに褒賞にのみ汲々としている當時の將軍たちに向かつて、左思は辛辣な逆説を浴びせかけてやりたい衝動に驅られたに違いない。「おれにやらせてみる、もつと立派にやつてみせるぞ」と彼はいいたいのである。だが如何せん、門地もなく貧賤に甘んじねばならぬ左思の現實社會での位置を考えれば、彼の夢想は夢のまた夢に過ぎぬ。現實世界に叩きつけられた彼の逆説は、究局彼自身をもその苦みの中に包みこんでしまわずにはおかぬ性格のものであつた。

第三首の詩において、段干木・魯仲連は單に昔話の主人

公として回想されるのではなく、左思自身の分身として行動している。左思はいわば彼自身の血を注ぎ込むことによつて、彼らを蘇生させたのである。文選の五臣注が左思の詠史詩について、「是の詩の意は、多く以て己れを喩う」と評する通り、八首の詩の中で登場する古人たちは、常に何らかの意味、何らかの程度において左思自身の投影であるといつてよい。つまり歴史の中に没入するのではなく、逆に歴史を現代の時點にまで引き出してくる態度なのだ。これは前章で考察した班固・王粲らの詠史詩と大きく趣きを異にする點である。

また明の胡應麟は詩數の中で次のように言う。「詠史の名は、起ること孟堅(班固)自りするも、但だ一事を指すのみ。魏の杜摯の毌丘儉に贈る(詩)は、疊用して古人の名を入れ、堆垛して變少なし。太沖の題は實に班に因り、體は亦た杜に本づく。」(外編卷二)班固の詠史詩は綬縈の物語を、王粲らのそれは三良の物語をそれぞれ專一に歌っているのに對して、左思の作品には常に數人の古人が登場する。こうした技法の源を胡應麟は杜摯の贈毌丘儉詩に求

めようとするのである。その杜摯の作品は「壯士は志未だ
伸びず、坎軻苦辛多し」と士の不遇をテーマにしつつ次の
ように故事を用いている。

伊摯爲媵臣

伊摯は媵臣と爲り

呂望身操竿

呂望は身 竿を操る

夷吾困商販

夷吾は商販に困し

甯戚對牛歎

甯戚は牛に對して歎す

食其處監門

食其は監門に處り

淮陰飢不餐

淮陰は飢えて餐せず

買臣老負薪

買臣は老いて薪を負い

妻叛呼不還

妻叛きて呼べども還らず

釋之宦十年

釋之は宦たること十年

位不增故官

位は故官より増さず

(以下略)

すでに前章で見た通り、詩中に故事や史上の人物を取り
入れる技法は曹氏父子以來多くその例を見ることができ、
したがって左思の技法が専ら杜摯の作品のみに基づくと信
じ込むのはいささか近視眼的であろう。それはともかくと

左思と詠史詩(興膳)

して、杜摯は八人の古人を並べ來つた後、「才は八子の倫
に非ざるも、而も其の患を齊しうす」と我が身を古人と對
比しているが、かかる斷わり書きめいた表現をわざわざ
添えなければならぬのは、作者自身の像が詩中でまだ古人
のイメージと完全に同化しきつていないからである。杜
摯に對する八人の古人の關係は、いつてみればまだ直喻
(Simile) の段階にとどまっている。これに對して、左思の
詩における古人は左思自身と同化し合う隱喻(Metaphor)
にまで成熟している。歴史を扱つた詩、詩人は決して少な
くない。しかし、まさにこの一點においてこそ、先にその
例を見ぬ左思獨自の個性が躍動しているというべきである。

四 寒士の苦悶

すでに見てきた通り、左思は一見大げさなほど自己の才
能と節義を誇稱する。たとえそれが現實社會の矛盾への逆
説として提示されていようと、自己に對する彼の確信には
いささかの影もなかつたはずである。いわば彼の自意識自
體の中から悲哀の生ずる余地はないのである。

しかし詠史詩が悲哀に満ちることもまた嚴然たる一つの事實である。ではその悲哀とはいかなる性質のものか、そしてその根ざすものは何か、これこそ私たちが今新たな考察の對象とすべき問題であろう。

鬱鬱潤底松 鬱鬱たる潤底の松

離離山上苗 離離たる山上の苗

以彼徑寸莖 彼の徑寸の莖を以て

蔭此百尺條 此の百尺の條を蔭す

世胄躡高位 世胄は高位を躡み

英俊沈下僚 英俊は下僚に沈む

地勢使之然 地勢 之を使って然らしむ

由來非一朝 由來 一朝に非ず

金張籍舊業 金張は舊業に籍す

七葉珥漢貂 七葉 漢貂を珥む

馮公豈不偉 馮公は豈に偉ならざらんや

白首不見招 白首にして招かれず

(第二首)

うつつそうと枝葉を繁らせる谷底の長松、誰一人としてそ

の巨大さたくましさを否定できるものはない。しかし、あの山頂のか弱い苗木を見よ。丈の高さ、幹の太さ、枝葉の繁り、凡そすべての面で谷底の巨松の足下にも及ばないのに、ただ山の頂きに生を受けたというだけのこと、松の上位に位し、谷底に射そうとする日ざしまでもさえぎつてゐるではないか。——詠史詩の中で珍しくも現われた敘景の句は、實は階級制社會に對する限りない憤懣と憎惡の感情が結晶したイメージである。自分は他の誰にも劣らぬ天分を持つ「英俊」なのであり、その才能は自分のためにも社會のためにも十全に生かされてこそ然るべきなのである。だが現實には、己れの才能はそれが本來受けるにふさわしい處遇を與えられていないし、また誰もそれを不當なこととして認めてはくれない。いや自分だけではない、高い才能を抱きながら、寒門に生まれたというだけの理由で空しく埋もれてゆく「英俊」がいかに多いことか。彼は何とかしてこの厚い壁を破つて外へ飛び出そうと試みる。しかし門閥制度の壁は彼の意志などおかまいなしにやはり嚴然としてそこに立ちはだかつてゐる。

壁の外の世界がついに至ることのできぬ境地であること
を認識せねばならぬとき、彼は現實の不條理を呪詛しながら、
せめてもの慰藉を歴史の回顧に求める。「地勢之を使

て然らしむ、由來一朝に非ず」過去にも自分のように苦い
宿命を味わつた人は多かつたのだ。たとえば漢の馮唐、彼
はよぼよぼの白髮頭になるまで一介の下つ端役人にすぎな
かつた。それも彼に才能がなかつたせいではない。それど
ころか、事實は文帝を前にして堂々と軍事の策を披瀝する
だけの才腕を備えていたのだ。現實はいきどおろしい。し
かしそれが如何ともし難い必然であるなら、せめて自分と
同じ宿命に泣いた古人とともに、この不條理を呪詛しよう
——左思は自分の心にこう語りかけるかのようにである。

寒門の士の慷慨は左思の次の世代の詩人郭璞らにも見ら
れ、鮑照ら宋代の詩人にも受け継がれてゆくが、自己の不
幸を門閥制度の犠牲として考えるいわば階級の意識は左思
においてはじめて明確な形をとつて出現したといつてよい。
これは魏の文帝が創始した人材を選抜するための九品中正
法が、晉に入つて急速に貴族化の方向に傾斜していつた事

實と重なり合うものに違いあるまい。(宮崎市定著「九品官
人法の研究」参照) 干寶はこの制度の亂れについて、「晉紀
總論」の中で次のように述べている。

「選者は人の爲に官を擇び、官者は身の爲に利を擇ぶ。
而うして秉鈞當軸の士は、身に官を兼ねるに十を以て數え、
大は其の尊を極め、小は其の要を録す。機事の失は、十に
して恒に八九。而うして世族貴戚の子弟は、陵邁超越して、
資次に拘わらず。悠悠たる風塵は、皆奔競の士、列官千百、
賢に讓るの擧無し。」

門閥制度の弊害と腐敗を非難することは、その他劉
毅・段灼等の議論にも見えている。

晉書によれば、左思の父左熹(字は彦雍)は、卑しい胥
吏の身から才能を見こまれて殿中侍御史に取りたてられた
人である。左思の妹左棻の墓誌は父の官位を大原相弋陽太
守(太守は六品官)とするが、恐らくこれは左棻が武帝の貴
嬪として宮廷に入つていたおかげで、父の死後追贈された
ものと思われ、晉書本傳その他の資料には見えていない。
左棻の「離思賦」に「蓬戸の側陋なるに生まれ、文符に閑

習せず」とあるのは、恐らく偽りのない實感だつたに違いない。だから左思にとつて出世の表街道を進む望みは、彼の能力以前の問題としてほとんど皆無に等しかつた。段灼の言葉を借りていえば、「華門蓬戸の俊、安んぞ陸沈する者有らざるを得んや」である。密かに才能を自負する左思としては、埋もれたままかりそめに生を送ることは、とうてい堪えられぬ屈辱だつたであろう。彼が「交遊を好まず、惟だ閑居を以て事と爲し」、専ら著作に日を費した心境は、現在にしてなおよく理解することができる。

その左思一家にとつて、降つて湧いたような大事件が起つた。泰始八年(二七二)、妹の左棻が武帝の修儀(女官の階級の一種)に召しかかえられたのである。彼女は後に貴嬪(諸后妃の一)になつてゐる。任官をほとんどあきらめていた左思からすれば、妹の果報は一筋の光明を仰ぐ思いだつたに相違ない。家を去つてゆく妹に贈つた四言詩「悼離贈妹」二首の中で、彼は長年親しんだはらからに離別する悲しみを述べつつも、妹の出世に對する素直な感動を隠そうとしてゐない。「峨峨たる令妹は、期に應じて生を挺んず。

蘭の秀の如く、芝の榮の如し」「光は邦族に曜き、名は時路に馳す。翼翼たる羣媛は、是れ瞻是れ慕う」。折から「三都賦」の構想を抱いていた左思は、これを契機に郷里齊國の臨淄を出て、首都洛陽に居を定める。世説新語文學篇の注に引く左思別傳には「思は人と爲り吏幹無くして文才有り、又た頗る椒房を以て自ら矜る、故に齊人重んぜざるなり」という。彼のように家柄の低さに劣等感を持ち、反面人一倍自負心の強い人物には、充分あり得る話かもしれない。都に居を移したことの背景には、妹の出世を機會に彼自らの活路を見出す企圖とともに、郷人の冷い眼ざしを意識したせいもあるのだろうか。

だが左思があればほど希望を託した妹の後宮入りは、事實彼の希望を滿たし得る果報だつたであろうか。晉書胡貴嬪傳によれば、「泰始九年(二七三)、帝多く良家の子女を簡び、以て内職に充て、自ら其の美なる者を選び、絳き紗を以て臂に繫がしむ」といい、胡貴嬪の父胡奮の傳には、「泰始末、武帝は政事に怠つて、色に耽る。大いに公卿の女を選び、以て六宮に充つ」とある。左棻と相い前後して、

多くの子女が同じ運命のもとに後宮に入つていつた事實が端なくも窺える。美女胡貴嬪は幸いに武帝の眼鏡になつて「専房の寵」を受けたが、左貴嬪の場合そううまくはゆかなかつた。第一、彼女は「良家の子女」でもなければ「公卿の女」でもない。その上晉書によれば、彼女は「姿陋くして寵無きも、才徳を以て禮せらる。體羸くして患多く、常に薄室に居る」という通り、容貌こそが全てを決する女性としては至つてパッとしない存在だつた。また左棻の墓志は彼女に子供のなかつたことも示している。つまり彼女の役割は、後宮の才女として、ただか武帝の右筆を務めたというに盡きるようだ。

現在彼女の作品として残るものに、武帝の元皇后楊氏の死を悼む誄、それに續いて迎えられた悼皇后楊氏への頌、武帝の娘萬年公主の誄などがあり、また各地方から珍しい寶が届けられると、武帝は必らず左棻に命じて賦頌を作らせ、そのたびに厚くほうびを取らせたとする。(晉書左貴嬪傳) これは後宮における彼女の地位を自ずと暗示している。兄たる左思は椒房を鼻にかけたかもしれないが、武帝は彼

女の才能を褒賞によつて購^{あな}える程度のものにしか意識していなかつたのだ。とすれば、妹の後宮入りがどれほどの利益を左思にもたらし得たかは自ずから明白であろう。

都洛陽へ出た左思は、三都賦の制作にとりかかる。不案内な蜀のことについては、この土地に詳しい張載に教えを受けながら、門から厠に至るまで家中のあらゆる場所に筆と紙を備え、一句を思いつくとその場所^たただちに書きつける徹底ぶりだつたという。恐らく彼は臨淄時代と同様、世間に交わらず、家に閉じこもつたままこの道一筋にうちこんだものであろう。詠史詩第四首で、左思はひつそりとしたあばら屋の中で著述にいそむ揚雄の像を描きながら、ほかならぬ彼自身の姿をそこに見つめざるを得なかつたのではなからうか。

濟濟京城内 濟濟たる京城の内

赫赫王侯居 赫赫たる王侯の居

冠蓋蔭四術 冠蓋 四術を蔭い

朱輪竟長衢 朱輪 長衢を竟む

朝集金張館 朝に金・張の館に集まり

暮宿許史廬 暮に許・史の廬に宿る

南鄰擊鐘磬 南鄰には鐘磬を撃ち

北里吹笙箏 北里には笙箏を吹く

寂寂楊子宅 寂寂たる楊子の宅

門無卿相輿 門に卿相の輿無し

寥寥空宇中 寥寥たる空宇の中

所講在玄虛 講ずる所は玄虛に在り

言論準宣尼 言論は宣尼なせらに準え

辭賦擬相如 辭賦は相如なせらに擬う

悠悠百世後 悠悠たり百世の後

英名擅八區 英名は八區ほしやまに擅しにす

堂々たる王侯の邸宅、にぎにぎしい車馬の行きかい、それはさながら當時の洛陽の繁華であり、おびただしい賓客が常に入りする金・張・許・史の邸のさまは、そのまま外戚楊氏や賈氏の榮華を彷彿とさせる。そしてその賑わいをよそに、あるいは世間からとり残されたように、ぼつねんと一人著述に没頭する揚雄は、宛然として彼左思の姿そのものではないか。揚雄はその存命中常に不幸にさいなま

れ、世人に理解者を得ることができなかつたというが、見よ、今や彼の哲學・文學は百世の後まで天下にその名譽を馳せているのだ。「悠悠百世後、英名擅八區」——この句は同時に左思自身の氣負いであり、また己れに對する勵ましのことばでもあろう。だがこの激越な壯語の蔭に、また彼の憤りと悲しみのひそむのを見逃すわけにはいかない。「自分の名は遠い遠い後の世に輝くことが可能かもしれない」だが現世での自分はとうてい浮かび上れそうにもない」——彼の胸をふとこんな焦燥ががすめなかつただろうか。左思の揚雄に對する傾倒ぶりはすでに第一首でも述べたが、この詩に至つてその關心が實に一通りのものでないことが知られる。詠史詩八首の中でも、作者自身を古人のイメージの中に全人的に同化させきつている點でこの詩の右に出るものはあるまい。それはいつてみれば、揚雄ともろともに一つの運命に溶け入ろうとするかのような傾倒ぶりなのである。

漢書揚雄傳賈が引く揚雄の自序が「家素もとより貧にして酒を著たしなむ。人の其の門に至ること希まれなり」というように、事

實揚雄の生活は貧しかった。漢書は彼の生活態度をまた次のように伝える。「清靜にして爲す亡く、奢欲なし。富貴に汲汲たらず、貧賤に戚戚たらず、廉隅を修めて名を當世に徼めず。家産は十金に過ぎず、乏しくして儋石の儲え無きも、晏如たるなり。自から大度有り、聖哲の書に非ざれば好まざるなり。其の意に非ざれば、富貴と雖も事えざるなり。」私は左思が揚雄の如く「貧賤に戚戚たらず」、貧乏暮しに「晏如」としていたとは思わない。もし彼がそのような恬然とした態度を取り得ていたら、そもそも詠史詩など生まれて来るはずがないからである。しかし第三者の眼には揚雄と左思がいかに異質の存在として映ろうと、左思からすればこの敬慕してやまぬ先達の像の中に、自分の現在・未來の運命がすべて籠められているように思えたのである。

左思が揚雄に共感を覺えたのは、置かれた境涯——貧——のためばかりではない。貧ならば階級制社會の矛盾として慷慨を發することもできた。しかし己れの貧しさに間接的につながるもう一つの苦惱——肉體的缺陷——に關しては、ただ

左思と詠史詩（輿論）

黙して恥を忍ぶよりほかなかつたのだ。晉書は左思の風貌を記して、「貌は寢く口は訥りなり」といい、世説新語容止篇に至つては彼の醜男ぶりを次のようなコントにまで仕組んでみせる始末だ。

「潘岳は妙に姿容有りて、神情好し。少時、彈を挾んで洛陽道に出ずれば、婦人の遇う者、手を連ねて共に之に繁わざるは莫し。左太沖は絶だ醜し。亦た復た岳に效いて遊邀するに、是に於て群嫗齊しく共に之に亂睡すれば、委頓して返りぬ。」

ところで斯波六郎博士がすでに指摘された通り（「中國文學における孤獨感」一九五八年岩波書店）、揚雄もまた至つて風采のあがらない男だつた。漢書揚雄傳は「口吃つて劇談する能わず、黙して深湛の思を好む」といい、班固の贊は桓譚の言葉を借りて「揚子雲の祿位容貌は人を動かす能わず」と評している。左思は我と彼とに共通する肉體的缺陷のゆえに、いつそ揚雄に親近感を覺えていたに違いない。さて醜男でもりであることは、いつの時代にも人を劣等感に迫り込む肉體的缺陷であることに變りはないが、左

思の時代にはもう少し特殊な意味で重大な問題をはらむものであつた。およそこの時代におけるほど面貌や言語が社會的に問題にされたことは他に類を見ないであろう。一たび晉書をひもとく者は、この面からなされる人物批評が往々にして個人の社會的評價に少なからぬ作用を及ぼすことに思い至るはずである。いま晉書の中からこうした批評のいくつかを列挙してみよう。

「穎は形美しくして、神昏く、書を知らず。然れども器性敦厚にして、事を志に委ぬ。故に其の美を成せり。」（成都王穎傳）

「衛玠、字は叔寶、年五歳にして、風神秀異。……總角にして羊車に乗り市に入れば、見る者皆以爲らく玉人なりと。之を觀る者都を傾く。驃騎將軍王濟は玠の舅なり。儻爽にして風姿有り。毎に玠を見れば、輒わち歎じて曰く、『珠玉の側に在れば、我が形の穢なきを覺ゆ』と。」（衛玠傳）

「(王)導は少くして風鑿有り、識量清遠なり。年十四にして、陳留の高士張公見て之を奇とし、其の從兄(王)敦

に謂いて曰く、『此の兒の容貌志氣は、將相の器なり』と。」

(王導傳)

「(孫)惠は口訥なり。學を好み才識有り。州辟せども就かず、蕭沛の間に寓居す。」(孫惠傳)

「(王)羲之は幼にして言に訥なれば、人未だ之を奇とせず。年十三にして、嘗て周顛に謁するに、顛察て之を異とす。」(王羲之傳)

一見して氣づくのは、「見而奇之」「察而異之」など人物批評の基準が相手を一目見たときの第一印象にあることだろう。

こうした印象批評がやがて個人に對する社會的評價として定着し、ついにはその人物の運命まで左右しかねないのである。また周知の如く清談はこの時代の貴族の社會生活に大きなウェイトを占めており、その巧拙は官位の昇進にまで影響したといわれる。辯舌さわやかであることは、出世のための必須條件だつたといつてもよい。世説新語に「言語」「容止」の二篇があり、「賞譽」「品藻」等の篇における人物評論が、多くの場合言語・容止の面からな

れている現象を見落してはならない。

だから「貌寝口訥」という肉體上の缺陷は、左思をさらに深い劣等感におとし入れ、いつそう世間に背を向けさせたと想像できる。そんな彼が揚雄という先達の中に自分と同じ缺陷を發見したとき、この先達に單なる敬慕以上の親近感を覺えるようになったのはむしろ當然としなければならぬ。

漢書の揚雄傳の贊の中で、班固は次のような興味深いエピソードを記している。揚雄の死を聞いた王邑・嚴尤の二人が桓譚にたずねた。「子は嘗に揚雄の書を稱するも、豈に能く後世に傳わらんや。」桓譚はこう答えた。「必ず傳わらん。願君と譚と見るに及ばざるなり。凡そ人は近きを賤しみて遠きを貴ぶ。親しく揚子雲の祿位容貌の人を動かす能わざるを見る、故に其の書を輕んず。昔老聃の虛無の言兩篇を著わずに、仁義を薄んじ、禮樂を非る。然るに後世の之を好む者は尙お以爲らく五經に過ぎたりと。漢の文・景の君自ら司馬遷に及ぶまで皆是の言有り。今揚子の書は文義至深にして、而も論は聖人に詭わらず、若し時君に遭遇し、

賢知を更闕して、善と稱する所と爲ら使むれば、必らず諸子を度越えん。」

「悠悠百世後、英名擅八區」の句を得たとき、左思は多分このエピソードを思い浮かべていたに違いない。（晉書には左思が外戚賈謐に漢書の講義を頼まれたとあり、この書に對する彼の蘊蓄のほどを物語る。）まこと揚雄こそは左思自身の投影であり、さればこそ左思は彼の存在を慰めとも勵ましとも慕つたのである。さらに史記・漢書の司馬相如傳には「相如は口吃にして善く書を著わす」とある。とすれば司馬相如もやはり吃りという肉體的缺陷を背負う人であつた。その相如を揚雄が慕つたときの心境は、ちようど今自分が揚雄に對するそれと似たものではなかつただろうか——左思はそんなことを考えていたかもしれない。ともあれ司馬相如・揚雄の左思に對する關係は、何やら因縁めいた絆につながれているように思われてならない。

ところで揚雄はその作品「解嘲」（文選卷四十五）の中で、優れた才能を有しながら世間的には不遇をかこつ自己の人生について、一つの辯明を行なつてゐる。彼によれば、戰

國時代のような國に道なき亂世においては、何とかして他國との生存競争に勝ち抜こうとする支配者の要請によつて、新奇なアイデアを持つ有能な人物が續々と拔擢されたが、當世（漢代）のごとく秩序が國家のすみずみにまでゆきわたつてゐる社會では、獨創的な思想を實踐しようとする試みることがむしろ社會秩序の破壊者として忌避されるといふのである。人間の才能は、それを受け入れ得る社會的條件があつてこそ生かされるものであり、揚雄自身が漢代という平穩無事の世に生まれてきた以上、自己の理想を政治の世界で實現することはあきらめて、學問の世界に自己の進む方向を見出すべきだと考へてゐる。^⑬これは現世の社會制度・秩序を是認した上で、自己の不遇な人生に調和的な理由づけを求めようとする態度である。文選の同じ卷に收められる東方朔の「答客難」、班固の「答賓戲」も根本的には同じ發想に出るものといつてよい。ここにおいて、自己の不遇の原因を階級制社會の矛盾に求める左思の思想が、前時代にはなかつた一つの新しい觀點に立つものであることは充分注意されてよいであらう。

五 歴史人物のイメージに見る

左思の自己象徴

詠史詩に登場する歴史上の人物は、必ずしもそのすべてが揚雄のごとく全人的に作者左思の投影である（少なくとも左思自身がそう意識していたと思われる）わけではない。ではそうした非左思的要素をより多く含む人物について、左思はどのような共感の示し方をしてゐるのか、そうして彼らについていかなるイメージを組み立てようとしてゐるか、私たちはいま焦點をこの問題に置きながら、さらに考察を深めることにしよう。

詠史詩第六首では、秦の始皇をねらう刺客荆軻が主役をつとめてゐる。

荆軻飲燕市 荆軻 燕の市に飲み

酒酣氣益振 酒酣たけなわにして氣益きよきす振う

哀歌和漸離 哀歌は漸離に和し

謂若傍無人 謂おもえらく傍らに人無ひときが若ごとしと

雖無壯士節 壯士の節無しと雖も

與世亦殊倫 世と亦た倫とらを殊はらにす

高眇逸四海 高眇して四海に逸はらかなり

豪右何足陳 豪右も何ぞ陳のぶるに足らん

貴者雖自貴 貴者は自ら貴ぶと雖も

視之若埃塵 之を視ること埃塵のごとの若く

賤者雖自賤 賤者は自ら賤しむと雖も

重之若千鈞 之を重んずること千鈞のごとの若し

ここで荆軻が稱えられるのは、彼が權門豪族を問題とせず、燕の市にとぐろを巻いてはもつぱら犬殺しや筑の名人高漸離ら裏街の住人といつしよに大酒をくらつていたという一事である。荆軻をも含めて彼らは「賤者」であり、「自ら賤しむ」者である。しかし、彼らが自らを賤しい者と認めつつ、しかも權勢に對しては一顧だに與えず昂然と構えた態度の中にこそ、人としての尊嚴があると左思はいうのだ。

ところで、その荆軻もすべての面で左思に高く評價されているわけではない。「壯士の節無しと雖も、世と亦た倫を殊にす」この句では、易水の別れに臨んでの有名な荆軻

左思と詠史詩（興膳）

の歌「風蕭蕭として易水寒く、壯士一たび去つて復た還らず」に見える「壯士」の語を、左思がわざわざ打ち消している點に注目せねばならぬ。これは司馬遷の描きあげた悲劇の英雄荆軻のイメージを部分的に否定したものである。燕太子丹の私憤に加擔して、無謀にも自分一人の力を過信して秦始皇を暗殺に出かけるなどというのは、立派なますらおのすべきことではないとでもいう考えが左思の心にあつたのだろうか。陶淵明の荆軻詩が「惜しいかな劔術の疎にして、奇功遂に成らず」と荆軻の壯舉をたたえつつその失敗を惜しむ態度とはかなり隔たつた意識がありそうだ。さらに妄想をたくましくするなら、荆軻を「壯士」に非ずと斷じたときの左思の意識には、荆軻を自分と同一次元の階級つまり「士」として遇するのではなく、一段低いヒエラルキーに屬する「賤者」と見なす左思自身の階級意識が作用していたのかもしれない。何焯の意見はこの説に近似するように思われる。「荆軻の首は、又た言う、博徒、狗屠と雖も、猶お軻倫の才有りと。碌碌たる豪右の自ら攀龍を託る者を視るに、方に復た夷然として屑いさましとせず。況ん

や、吾が齊をや。」（義門讀書記）

荆軻という人物にまつわるイメージとして後世最も普遍的なものは、例の易水の別れの場面であるといつてよからう。荆軻の故事を扱った作品として知られる阮瑀の「詠史詩」・陶淵明の「詠荆軻」詩・梁の江淹の「別賦」などでは、いずれもこの場面が作品のクライマックスをなす部分として構成されていることを考え合わせてみるがよい。また唐詩選が載せる駱賓王の五言絶句「易水送別」においても、感動はまさにこのシーンに凝集している。

此地別燕丹 此の地に燕丹と別れ

壯士髮衝冠 壯士 髮 冠を衝く

昔時人已沒 昔時 人已に沒し

今日水猶寒 今日 水猶お寒し

ところが左思はこの場面を取り上げようとしなければかりか、荆軻が自らについていう「壯士」の語を打ち消してみせてさえるのだ。彼の描くのは、陋巷に傲然と盃を衝む誇り高き「賤者」の姿である。これは文學に形象される荆軻のイメージとしてはむしろ例外的なものといわざるを得

ない。思うに、左思にとつて「士は己れを知る者の爲に死す」という刺客列傳のモチーフなど、主要な關心事ではなかつたのであろう。荆軻が燕の太子丹のために秦始皇の命をねらう刺客であることは、左思からすれば第二義的なことにすぎない。陋巷にあつて貧にさいなまれながら人間としての誇りを失わずに生きる——この左思自身の像を荆軻のイメージの中にかにして再現するか、これこそが彼の當面する課題だつたのである。

詩の内容とは別に、左思の實生活に即して考えてみると、「貴者は自ら貴ぶと雖も、之を視ること埃塵の若し」という聲高らかな宣言も、どこまで彼の行動上の事實として認め得るかはかなり問題である。晉書は彼が三都賦の執筆に際して見聞の狭さを感じ、自ら求めて祕書郎となつたといひ、世説新語文學篇注の引く左思別傳は、權力者の賈謐かひつの推舉で祕書郎となつたという。いずれにしても、これは左思の生涯において最初のそして一度の官仕えであつた。また晉書賈謐傳には、この外戚賈謐のサロンに出入りした「貴游豪戚及び浮競の徒」たる取り巻き文人「二十四友」

の一人として、石崇・潘岳・陸機・陸雲・劉琨らとともに左思の名が見えている。賈謐が惠帝の皇后賈氏の一族として勢力をほしいままにしたのは、賈后が皇太后楊氏を廢しその父楊駿を殺して国家權力を一手に掌握した元康元年（二九一）以後のことだから、左思が二十四友の一員に加わつたのもほぼこの年以後のことと想像できる。

左思の仕官、そして賈謐のサロンへの出入りは、三都賦創作のための資料を得べく有利な立場に身を置いたというだけの動機に出るものではなく、妹の入内を挺子として少しでも陽のあたる場所に出ようとする意圖が大きく働いていたとみてよからう。石崇と潘岳が賈謐の車の塵を伏し拜んだ話（晉書・石崇傳）といい、文人たちがみな「文才を以て節を降して賈謐に事う」という記述（晉書劉琨傳）といひ、二十四友の賈謐に對する關係が世俗的なおもむくに強く支配されていたことを裏付けている。（もつとも嵇紹が賈謐の誘いに乗らず、後でそのことが美德とされたという話が暗示するように、この勢族の懲進を斷わることが大きな勇氣を要したことは確かだろう。）二十四友の頭目格である石崇や潘岳が

左思と詠史詩（輿膳）

あのありさまだから、陸機等を除く他の群小文人たちの卑屈な態度は推して知るべきだろう。では、左思のおもむくは彼に有利な情況をもたらし得ただろうか。それについて物語る資料は何もない。しかしどのみち縦横の機知と溢れる辯舌の要求される貴族のサロンで、容貌醜惡にして、言語訥訥、その上門地もない彼が満足な成果を得たとはどうい考えられない。彼が以後ついに官位を累ねることがなかつた事實は、その間の經緯を暗示するように思われる。左思は第七首において、才能に恵まれながら不遇に泣いた人々が古來決して少なくなかつたことを、四人の古人の挿話によつて描く。

主父宦不達	主父は宦うれども達せず
骨肉還相薄	骨肉すら還お相い薄んず
買臣困采樵	買臣は采樵に困し
伉儷不安宅	伉儷も宅に安んぜず
陳平無產業	陳平は產業無く
歸來翳負郭	歸來 負郭に翳る
長卿還成都	長卿は成都に還り

壁立何寥廓 壁立つて何ぞ寥廓たる

四賢豈不偉 四賢 豈に偉ならざらんや

遺烈光篇籍 遺烈 篇籍に光れり

當其未遇時 其の未だ時に遇わざるに當つては

憂在墳溝壑 憂いは溝壑を填むるに在り

英雄有屯遭 英雄も屯遭すること有り

由來自古昔 由來 古昔自りす

何世無奇才 何の世か奇才無からん

遺之在草澤 之を遺てて草澤に在らしむ

主父偃・朱買臣・陳平・司馬相如という四人の漢人の逸

話を、文心雕龍のいわゆる「事對」の手法に織りなしつつ、
彼らの貧窮と不遇をうたつてゐる。「四賢豈不偉、遺列光
篇籍」「英雄有屯遭、由來自古昔、何世無奇才、遺之在草
澤」の句々は、馮公をうたつた第二首の「地勢使之然、由
來非一朝」「馮公豈不偉、白首不見招」等の句と思想上・
技法上において近似の關係にある。しかしさらに詳細にこ
の一首を検討してみると、私たちはこの四人の漢人が演
じている役割が先の馮唐のそれと決して同じではないこと

に氣づくのである。

史記や漢書の傳を参照すると、この四人の漢人の生涯は
ある一點において際だつた共通性をもつてゐる。それはつ
まり彼らが人生のある時期までひどい貧窮にさいなまれな
がら、後半生に至つて幸運に恵まれ、財力や地位を得たと
いうことである。彼らに「未だ時に遇わざる」状態のあつ
たことは、やがて「時に遇う」境涯の訪れるまでの過渡的
な不幸として認識される。それは第二首の馮唐が白髮頭の
老人になるまで世に認められずに終つた場合とは明らかに
違つてゐる。もちろん彼ら四人は衆に絶した高い才能に恵
まれる「英雄」「奇才」であり、そうした人物が當然受け
て然るべき處遇を後半生においてようやく獲得したのであ
る。しかし才能の問題なら、彼ら「四賢」も「馮公」も
「豈に偉ならざらんや」——ともに優れた能力の持ち主だ
つたはずなのだ。にもかかわらず、一方は後年志を達し、
他方は生涯窮したままで終つてゐる。左思は個人の才能と
人生の幸不幸の齟齬を前後二首の中で取り上げながら、登
場人物に託した彼の心情は實は同じではないのだ。自己の

才能に誇りを抱く左思にしてみれば、たとえ現在はいかに「草澤」の間に埋もれる悲哀を味わつていようと、いつの日か「四賢」の如く世に見出されたい、いや見出されなければならぬ、決して馮唐の如く生涯認められず終るようなことがあつてはならぬと考えているのではなからうか。

蛇足までにつけ加えておくと、主父偃・朱買臣・陳平・司馬相如の四人の生涯には、さらに些細な点での部分的共通性がある。第一には、貧窮時代、骨肉近親からさえ侮蔑

をあげせられ、成功者となつた後その意趣を晴らす(主父偃・朱買臣)ことであり、第二には、貧家に育ちながら、のち富家の娘を娶つて富裕になる(陳平・司馬相如)ことである。左思自身が骨肉近親に冷笑されるあまり意趣返しを考えていたり、貧富は婚姻の偶然によるという哲學(?)を持つていたなどと想像しては、あまりに私小説的で穿鑿に過ぎようか。(もつとも前者については、後に第八首に見る通り、こうした憶測の可能性もありうるが。)

ところで彼ら四人の漢人は、この一首における限り、貧窮に苦しむ人物としての観点からのみ描かれ、揚雄の場合

左思と詠史詩(興膳)

のような全人的イメージとしては扱われていない。少なくとも丞相として縦横の才略を馳せる陳平、華麗な美文の作者としての司馬相如の姿はこの詩にはついにない。さらにまた司馬相如についていえば、左思の同時代人の多くが相如に對して抱いていたイメージも、左思のそれとはかなり趣きの異なるものであつたように思われる。私が想像の據り所とするのは、次にあげる世説新語の相如を扱つた二つのエピソードである。

「王子猷(王徽之)敬之(王獻之)兄弟、共に高士傳の人及び贊を賞す。子敬は『井丹の高潔』を賞す。子猷云う、未だ『長卿の慢世』には若かずと。」(品藻篇)

「王孝伯(王恭)王大(王忱)に問う、『阮籍は司馬相如に何如』と。王大曰く、『阮籍は胸中壘塊、故に酒を須いて之に澆ぐ』と。」(任誕篇) (劉注にいう、言うところは阮は皆相如に同じくして、飲酒異るのみ。)

二つの逸話における司馬相如は、阮籍に代表されるような常識の意表を衝いて奔放な人生を送る魏晉人の一面を付與されている。恐らく卓文君とかけ落ちして酒場をはじめ、

パンツ一つで皿洗いをしていたあたりのイメージが固定してそうなつたものであろう。左思と違つて、ここでは司馬相如の貧窮ぶりが全く話題に上つていないのも、世説が貴族文明の所産であることを考慮すれば、自ずと納得できる現象といえよう。さらにまた文心雕龍が「長卿は傲誕、故に理^{おびただ}侈^{あま}しくして辭溢る」(體性篇)、「相如は妻を竊^{ちす}みて金を受く」(程器篇)など、もつぱら相如の奔放で常識の埒外にある行動を問題にしていることも、以上の推測を裏付けるに足る。揚雄の「解嘲」の「司馬長卿は貨を卓氏に竊^{ちす}み、東方朔は炙を細君に割^くく」などは、この系列のイメージとして早い時期に屬するものである。

私たちは文學作品に接するとき、ちようどハヤカワ氏が指摘するように、「話の主要人物たちが、何らかの程度において、われわれをシンボル化するとき、最も深い喜びを見出す」(「思想と行動における言語」大久保忠利譯・岩波書店)という經驗を持つてゐるはずである。ただ、「シンボル化」といつても、それはあくまで讀者のある一面を作中人物が「シンボル化」するにとどまるものである以上、Aという

讀者に強い共感を與えた作中人物の人間性が、Bという人には全く別の面で感動を覚えさせたとしても怪しむには足りない。裏返していえば、讀者の問題意識のありようによつて、作中人物について理解できる面とそうでない面、共感できる面とそうでない面が決定されることになる。いま司馬相如についていうなら、左思は相如の貧窮という一面に自己の「シンボル化」を意識して共感したのであり、王徽之や王忱といつた貴族たちは、放誕な處世という面で相如に自己の「シンボル化」を感じ取つたのである。少なくとも左思にとつては、相如が憤鼻禪一つで皿洗いをしたことより、「家居徒^ましくして四壁立つ」という彼の貧乏生活の實態の方が主要な關心事であつたことは疑いない事實といふべきであらう。これは前に述べた荆軻が、左思においては「己れを知る者」のために殉じた悲劇の英雄としてよりは、傲然と世に對する「賤者」として共感の對象であつたことと同じである。

左思におけるこうした共感の示し方は、彼の文學作品全體についてみると、極めて徹底したものであることに氣

づかざるを得ない。左思の三都賦は十年の歳月を費やして完成したといわれる畢生の大作だが、そのうちの一つ蜀都賦の結尾近くには、蜀都の人材を論じた次のような個所が見出される。

「近くは則ち江漢炳靈にして、世其の英を載す。蔚たること相如の若く、鬪たること君平の如し。王褒は謙嘩として秀發し、揚雄は章を含んで挺生す。幽思は道德に拘らかに、藻を摘べて天庭を抜う。四海に考えて僞と爲し、中葉に當つて名を擅にす。是の故に遊談する者は以て譽と爲し、造作する者は以て程と爲すなり。」

ここで左思は蜀都の人材として、司馬相如、嚴君平、王褒、揚雄の四人を擧げているのだが、この四人の組合せはいささか奇異ともいえる要素をはらんでいる。四人のうち司馬相如、王褒、揚雄の三人は漢代に名だたる文學者ことに賦の名手として知られ、文心雕龍詮賦篇、沈約の宋書謝靈運傳論など、およそ漢代文學について論じられるとき、必らず言及される名前である。四人の中でひとり異彩を放つのは嚴君平つまり嚴遵である。彼は文學者として人々の

記憶にはなく、ただ成都の市場で卜筮を業とし、利慾に恬淡として生を終えた「市隱」として漢書にその名が見える。

（列傳四十二王貢兩龔鮑傳）彼はまた老莊の學に廣く通じ、「老子指歸」十一卷（隋書經籍志）の著者でもあつた。李善の注は彼が老子指歸を著わしたこと、および揚雄が太玄經・方言を作つたことが、すなわち「幽思綯道德」の内容であるという。（嚴遵は揚雄の師にあたる。）李善の説を一應認めてかかるにしても、改めてこの四人の組合わせを見渡すとき、やはり嚴君平一人が特殊な存在であるように思えてならない。

左思はなぜこの四人を一つのグループに組織したのでろうか。思うに左思は彼ら四人がいずれも貧士であつたこと、すくなくとも貧士の階級の出身であることに共感を覺えていたのではあるまいか。司馬相如・揚雄の二人についてはすでに述べた通りであるが、王褒にしても「聖主得賢臣頌」において「窮巷の中に生まれ、蓬茨の下に長ず」と自ら述懐する通り、決して幸運な星の下に生まれた人ではなかつたのである。彼は漢の宣帝に文學の才能を愛でられて、

朝廷のお抱え文人として生涯を終え、諫大夫となつたのがその最終官位であつた。作家としての名聲はともかく、その社會的地位は決して高いとはいへなかつた。左思がこの四人の漢人をもとさらに顯彰する發想の根底には、依然として自らの貧賤に對するあの根強い意識が潜んでいるといえるようである。

これと同様の現象は魏都賦でもまた確かめることができる。この賦の結尾近くで賛嘆される魏都の人材——戰國の魏絳・段干木・信陵君・張儀・張祿（范雎）——のうち、段干木・張儀・張祿の三人は明らかに貧士あるいは貧士の出身者であり、また信陵君の場合は、次に引くように貧士侯嬴を手厚く遇した美徳がとりたてて讃えられているのである。^⑩

「貴きこと吾が尊には非ず、士を重んずること山をも踰え、親しく監門に御し、嘽嘽として軒を同じうし、秦を擲えて趙を起し、威を八蕃に振うは、則ち信陵の名、蘭芬の若きなり。」

左思は三都賦序で、「言を發して詩を爲る者は、其の志

とする所を詠うなり。高きに升つて能く賦する者は、其の見る所を頌むるなり」と詩と賦の創作態度を區別するが、以上のような現象をつぶさに見てくると、彼は賦においてすら「其の志とする所」を詠わずにはいられなかつたのではないかと疑われる。

六 幻 滅

左思が詠史詩においてはもとより、ことあるごとに訴え續けた寒士の憤りと悲しみは、結局過酷な實社會の齒車の回轉に押しひしがれ、かき消されていつた。人間社會の不平等を苦い思いでかみしめるとき、左思の意識は人を誰彼の差別なく迎え入れてくれる無私な自然に向かつて動いていた。新刊の游國恩・王起等編の「中國文學史」は、詠史詩が「詩人の積極から消極に至る過程を反映する」ことを指摘している。階級制の自覺にはじまる不條理への抗議が人間不在の自然における生命充足感に到り着かざるを得なかつたことは、たしかに満足な結果ではあるまい。しかし私たちはそのことで詩人を責める前に、あの強烈な精神の

發揚をこのような方向に撓めていつた現實の過酷さをもう一度よく認識しておくべきであろう。

皓天舒白日 皓天 白日を舒べ

靈景耀神州 靈景 神州に耀く

列宅紫宮裏 宅を紫宮の裏に列ね

飛宇若雲浮 飛宇は雲の浮ぶが若し

峩峩高門内 峩峩たる高門の内

藹藹皆王侯 藹藹として皆王侯

自非攀龍客 攀龍の客に非ざる自りは

何爲歛來遊 何爲れぞ歛ち來り遊ばん

被褐出閭闔 褐を被て閭闔を出で

高步追許由 高步して許由を追う

振衣千仞崗 衣を千仞の崗に振り

濯足萬里流 足を萬里の流れに濯う

(第五首)

詩の前半は揚雄を歌つた第四首の前半と同じく、王侯貴族の豪華な生活ぶりを追つている。まず最初の一聯「皓天舒白日、靈景耀神州」は、眞晝の日ざしを投げかける太陽

左思と詠史詩(興膳)

の鮮明にして強烈なイメージである。その日ざしは、王侯貴族の贅を盡くした華麗な邸宅の上に照り映えることによつて、いつそ復雜な輝きを呼びおこす。ところでこの「白日」「靈景」は、例えば「白日麗飛甍、白日照園林」(謝朓「晚登三山還望京邑」)「暮春和氣應、白日照園林」(張翰「雜詩」)のような單なる敘景としての役割を持つだけでなく、もつと屈折した暗示的意味を包含しているのではないかと疑われる。太陽はこの廣大な「神州」——中国の地にあまねく光を投げかけ、森羅萬象ごとごとくその陽光の中に息づいているはずである。しかるに第二聯以下において陽光を浴びきらびやかな光彩を放つて視界に現われるのは、ただ王侯貴族の第宅のみである。等しく世界を照らすべき太陽すらかく不平等なのか——表面的にはさりげない敘景の假面の下で、左思の怒りはふつふつとたぎっている。王侯貴族の門前には車馬の物音がかまびすしく、客人たちは皆胸に一物を抱きつつ、しげしげと邸を訪れる。「攀龍の客」——左思自身もかつてはそうだった。何とかして自分の能力を生かし得る社會的地位を確保したい、寒門出

身者であるというだけのことで空しく埋もれてしまいたくない、この氣持は眞實だつた。だがいかにそれを願おうと、この現實社會では結局は空しい願望に終るべきことを知つたとき、決して「攀龍の客」でありたくないとむしろ強く望むようになる。これも彼の心境が至りついた眞實の境地である。國に道なきこの現實においては、褐を着て玉を抱き、虚偽も差別もなく萬物が自由に生命を充足させている自然の中にわが身を潜めることもやむを得ないのではないか。自分は自然の中で自由人として生きよう。そして現實社會で充たされなかつた人生を存分に充實させよう。

「振衣千仞崗、濯足萬里流」——ここには何者も侵すことを許さない左思の誇りがある。それは第一首に見られる自己の才能についての自信と自ずから兄弟の關係にあり、挫折感・敗北の意識などは表面には微塵も姿を見せない。しかし山林を志向し隱逸を願う左思の心は、究極最後の第八首に見るような、痛ましい絶望感に裏付けられるものにはかならなかつた。第七首までの誇り高い慷慨の姿勢にくらべて、彼が最後に至りついた認識はまたあまりにも暗く

悲惨なものであつた。

習習籠中鳥	習習たる籠中の鳥
舉翮觸四隅	翮 ^{つばさ} を擧げて四隅に觸る
落落窮巷士	落落たる窮巷の士
抱影守空廬	影を抱きて空廬を守る
出門無通路	門を出ずるに通路無く
枳棘塞中塗	枳棘は中塗に塞がる
計策棄不收	計策は棄てて收められず
塊若枯池魚	塊として枯池の魚の若し ^{ごと}
外望無寸祿	外に望みて寸祿無く
內顧無斗儲	内に顧みて斗儲無し
親戚還相蔑	親戚は還つて相い蔑 ^{あなど} り
朋友日夜疎	朋友も日夜に疎し
蘇秦北遊說	蘇秦 北に遊說し
李斯西上書	李斯 西に上書す
俛仰生榮華	俛仰に榮華を生じ
咄嗟復彫枯	咄嗟 復た彫枯す
飲河期滿腹	河に飲むに腹に滿つるを期す

貴足不願餘 足るを貴びて餘を願わず

巢林棲一枝 林に巢くいて一枝に棲むは

可爲達士模 達士の模と爲す可し

二十句にわたつて展開されるこの詩は、いうまでもなく八首中最も長い作品である。

少しでも羽を動かせば籠につき當る哀れな籠の鳥のような己れの姿、門を出ようにも通路はなく、身を傷つけようとする枳棘の悪意が我が行く手をさえぎっている。斯波博士の指摘によれば、「窮巷」の語は「人の生い立ちをいう場合に用いられる」例が多いという。とすれば左思は自己の屬する階級を出口のない「樊籠」として意識したのである。

第七首までの左思は、我が身を取りまく現實の悪意を描きはしても、それに對して敢然と反抗する姿勢をくずさなかつた。だが第八首の彼はすでに反抗に倦み疲れた人である。現實社會に對する疑惑と反撥はなお存するにしても、聲を大にして抗議の意志を示すことの無益を知つた人である。悪意の枳棘は常に彼の行く手をはばみ續けてきたが、

反抗の姿勢が保たれる限り、それはなお外的な障害たるとどまるものだつた。いま絶望の底から外の世界を眺めるとき、厚い憂愁のとはりは垂れこめ、彼自身の姿の認識にも顯著な變化が生じる。「籠中鳥」「枯池魚」、これらは自己の未來がどうにも拓けようのないことを確認させられた後にはじめて結ばれたイメージである。

左思がこうした心境に至り着いたとき、わずかに自らを慰める據りどころとしたのは、榮達の空しさ、はかなさであつた。その思いを説くために引き出された古人―蘇秦・李斯―は、いずれも若いころ貧に苦しみ貧を憎んで、榮達に志した人々である。蘇秦は貧乏時代彼を輕蔑して齒牙にもかけなかつた兄嫁が、六國の印綬を帯びて故郷に錦を飾つた彼をうつつ變つた丁重さで迎えるのを見て言つた。

「此れ一人の身なるに、富貴なれば親戚これを畏懼れ、貧賤なればこれを輕易る、況んや衆人をや。」また李斯は志を抱いて秦に旅立とうとするに際し、師たる荀卿にむかつて言つた。「詬は卑賤より大なるは莫く、悲しきは窮困より甚だしきは莫し。久しく卑賤の位・困苦の地に處り、世

を非りて利を惡み、自ら無爲に託するは、此れ士の情に非ざるなり。」彼らは望み通り富貴と名譽を得た。だが辛苦の未得られた彼らの榮達の末路は、またあまりにもみじめではなかつたか。蘇秦は燕で刺客に暗殺され、李斯は秦の二世にうとまれて死刑に處せられた。李斯自らが危惧したように、彼らの悲劇は畢竟「物極まれば則ち衰う」という道理を體得し得ず、出處進退を誤つたことに原因している。いま左思の置かれた境遇はちやうど彼ら二人の青年時代のごとく「寸祿」「斗儲」すらもない困窮の極にあり、親戚・朋友にさげすまれ疎まれる状態まで彼らにそのままである。しかし榮達の果てが所詮彼ら二人の悲劇にしか行き着き得ないものなら、自分の未來の人生は貧賤を貧賤として肯定するところから始まるといわねばならぬ。

左思はほんとうに仕官の空しさを悟りきつていたのであるか。ある時には、事實自分の人生はこうしかならないのだと思つたかもしれない。だが彼のあの強靱な自我がそうしたやすく崩折れたとは考えられぬ。仕官の道は所詮空しいものだとつづやきながら、左思は己れの自尊心が依然とし

て目覺めているのをどうしようもなかつたに違いない。我が心よ眠れ——彼は苦い思いをかみしめながら、我と我が心にこう呼びかけたであろう。左思はつましく自らの分に安んじて生きる「鷓鴣」「偃鼠」の生き方に意識を沈めることこそ、平穩に人生を全うする唯一の道であることに氣づかなければならなかつた。動搖と苦悶はなお續いたかもしれない。しかし、ともかく左思の晩年はこのような人生觀の實踐として送られていつた。三都賦創作のため祕書郎となつて以來、左思は二度と官に仕えようとはしなかつたのである。

左思は第五首の詩で見たように、このころ隱者の生活に憧憬を覺えていた。その感情のより詳細な展開は招隱詩二首の中に見られる。

左思が全精力を傾けつくしてきた大作三都賦は、恐らく武帝の太康年間(二八〇〜二九〇)の初期には完成してゐたものと思われる。^②發表當時は至つて不評だったが、張華の激賞を受け、名士皇甫謐の序文を得てからはうつつ變つて大評判で迎えられ、張載が魏都賦に、劉逵が蜀都賦、吳都賦

にそれぞれ注を書き、ついには時のベスト・セラーとなつて洛陽の紙價を貴からしめたという。左思が名門の隱者皇甫謐に序文を求めたのも、あるいは彼の當時の人生觀の反映であつたのかもしれない。

左思の人生に二度目の決定的な轉機が訪れたのは永康元年(三〇〇)のことであつた。この年は正月から日蝕があつたり、大風が吹いたり、天文五行の異變があい繼ぎ、人々は何か不吉な予感を抱いていた。果せるかな、四月、梁王彤と趙王倫が惠帝の皇后賈氏一門の專横に反抗して軍を起し、賈后は廢され、賈謐以下潘岳・石崇等の一黨はことごとく殺害された。三都賦が世に出るために援助を惜しまなかつた張華が殺されたのもこの時である。これをきつかけにいわゆる八王の亂は更に激越化し、以後西晉の秩序はついに回復されることがなかつた。左思はそれまで賈謐に求められて漢書を講義していたが、パトロンである賈謐の誅された後は宜春里に蟄居したという。(宜春里とは陝西省の地名と考えられる。世説文學篇注の引く左思別傳によれば、彼は賈謐の死後郷里へ歸つたという。)

左思と詠史詩(輿膳)

しかし左思に大きな衝撃を與えたのはこれだけではなかつた。妹左棻の墓誌によれば、左棻はまさにこの年の三月十八日に亡くなり、四月二十五日、武帝の墓地峻陽陵の西微道に葬られたのである。左思があればど愛した妹、一時は我が身の榮達の手引きとも期待した妹左棻は、血なまぐさい風雲をはらむ騷亂の前夜に世を去り、おどろおどろしく響き渡る軍鼓の音の中で埋葬された。左思に残されていたあるかなきかの希望はすべて消え去つたのである。

もつともこの後彼に仕官の機會が全くなかつたわけではない。動亂期における實力者の一人齊王囧が左思を記室督(左思別傳では記室參軍)に任用したのがそれである。だが左思は病氣を口實にこの僉通を謝絶した。今や蒼然として老いに近ずき、かつ周圍の人々を次々と失つて全ての望みを絶つた左思にしてみれば、今さら官途につくことなど更に眼中になかつたであらう。このころ作られたと思われる雜詩一首は、よく彼の晩年の心境を物語つている。

秋風何冽冽

秋風 何ぞ冽冽たる

白露爲朝霜

白露 朝の霜と爲る

柔條旦夕勁 柔條は旦夕に勁きも

綠葉日夜黃 綠葉は日夜に黃ばむ

明月出雲崖 明月 雲崖に出で

嫩嫩流素光 嫩嫩きようきようとして素光を流す

披軒臨前庭 軒まどを披ひらいて前庭に臨めば

嗷嗷晨鴈翔 嗷嗷ごうごうとして晨鴈は翔る

高志局四海 高志は四海をも局せましとするも

塊然守空堂 塊然として空堂を守る

壯齒不恒居 壯齒 恒には居らず

歲暮常慨慷 歲暮れて常に慨慷す

「高志局四海、塊然守空堂」——自己の才能への自負と

現實への憤りは依然として失われていない。それは死を意
識した老殘の悲哀と撚りあわされることによつて、いつそ
う複雑に左思の憂悶を深めていつたように思われる。

左思を任用しようとした齊王囧も、太安元年(三〇二)
には反對派の齊都王穎らによつて殺害された。次いで太安
三年(三〇三)から翌永興元年(三〇四)にかけて、河間王
顒麾下の將軍張方が京都洛陽に侵入し完全に都の秩序が破

壊されると、左思は一家をあげて冀州(河北・山西地方)に
移り住んだ。だがこの地方も間もなく北方民族の侵略を受
けて、見るかげもない荒廢にさらされたはずである。そし
てその數年後に左思は死んだ。彼がいつどのようにして死
んだのか、誰もそれを語つてはくれない。

七 詠史詩の後裔

この章では、左思以後の詠史詩、より廣義には歴史人
物・故事を扱つた詩がどのような展開を遂げていつたかを
見ることにしよう。まずいきなり結論から始めることにす
れば、左思の詠史詩は歴史に對決する作家の態度そのもの
に大きな變革をもたらした。第一には、左思以後の詩が
漢・魏の詠史詩に比べて歴史故事の物語性に依存する度合
が薄くなることであり、次には歴史人物のイメージを借り
た詠志・詠懷の傾向がいつそう著しくなり、ことに貧士の
詠懷として歌われる場合が多くなることである。

左思と親交のあつた張載の弟である三張の一人張協に詠
史詩一首があるが、これは止足の分を悟つて官を去り、惜し

まれながら野に退いた漢の二疏の故事を扱った作品である。

昔在西京時

昔在西京の時

朝野多歡娛

朝野 歡娛多し

藹藹東都門

藹藹たる東都の門

羣公祖二疏

羣公 二疏を祖す

朱軒曜金城

朱軒 金城に曜き

供帳臨長衢

供帳して長衢に臨む

達人知止足

達人は止足を知り

遺榮忽如無

榮を遺てて忽ち無きが如し

抽簪解朝衣

簪を抽きて朝衣を解き

散髮歸海隅

髮を散らして海隅に歸る

行人爲隕涕

行人 爲に涕を隕して(云う)

賢哉此丈夫

賢なるかな此の丈夫と

揮金樂當年

金を揮いて當年を楽しみ

歲暮不留儲

歲暮れて儲を留めず

顧謂四坐賓

顧みて四坐の賓に謂う

多財爲累愚

多財は愚を累わすと爲すと

清風激萬代

清風 萬代に激し

左思と詠史詩(輿體)

名與天壤俱

名は天壤と俱なり

咄此蟬冕客

咄 此の蟬冕の客よ

君紳宜見書

君が紳に宜しく書さるべし

文選六臣注によれば、この詩は官位に戀々とする出世の亡者どもを風刺したのだという。それは「咄此蟬冕客、君紳宜見書」という最後の二句に自ずから示されている。ところで張協は河間内史の任にあるとき、天下すでに争亂に明け暮れて秩序の失われたありさまを見て、俗世から身をひき、草澤に隱遁して創作に慰めを見出した。恐らく八王の亂が泥沼状態を示してきた三〇〇年から四・五年の間のことであろう。張協は一方で出世者の高官たちを嘲りながら、同時にいさぎよく身を退いて反抗の氣概を示した彼自らを疏廣・疏受のイメージに重ね合わせて形象しているように思われる。(この方向は後に陶淵明の「詠二疏」詩に引きつがれる。)張氏もさして立派な家柄ではない。彼が身を二疏になぞらえて隱遁を決意するまでには、左思に相似た寒士の憂悶に苦しめられたことであろう。

張協は左思の同時代人だから、この詩が左思の詠史詩に

多少とも影響された上での作かどうかはもちろんわからぬ。物語性の強さなどからすれば、少なくとも技法の面で左思を意識したものはなさそうである。

一世代下つて東晉の世に入ると、袁宏の詠史詩二首が目にとまる。この詩については世説新語文學篇にあらまし次のようなエピソードが見えている。

袁宏は若いころ貧乏で、傭われて年貢の運搬をしていたことがある。ある夜謝尚が船遊びをしていると、折から風さわやかに月澄みわたり、河岸の商人舟から吟詩の聲が聞えてくる。その聲がいかにも風情に富み、さらに詠つていゝる五言詩がこれまでつと耳にせぬすばらしさに、謝尚はしばしうつとりと聞きほれていた。さつそく使いをやつて問いただすと、それは袁宏が自作の詠史詩を朗詠していたのだつた。そこで一座に迎え入れて、大いに賞讃した。

これをきつかけに袁宏は謝尚に任用されたのだから、詠史詩は文字通り彼の出世作であつた。いま二首のうち第一首を掲げる。

周昌梗概臣 周昌は梗概の臣

辭達不爲訥 辭達して訥と爲さず

汲黯社稷器 汲黯は社稷の器

棟梁天表骨 棟梁 天表の骨

陸賈厭解紛 陸賈は紛を解くに厭き

時與酒檣杄 時に酒と檣杄す

婉轉將相門 將相の門に婉轉し

一言和平勃 一言にして(陳)平・(周)勃を和す

趨舍各有之 趨舍 おのおの之有り

俱令道不沒 俱に道を令て没さざらしむ

なお第二首では同じく漢の楊惲のことが歌われている。大貴族謝尚を三歎させたこの詩に、左思のあの痛烈な批判精神が缺けるのは當然としても、これも史實に依據した一種の詠懐の詩であることには違いない。三人の漢人のイメージを重ね合わせて自己の思想を投影する技法などは、ことに左思の影響の著しいものではあるまいか。またこの詩が袁宏の貧窮時代に作られたという背景は、詠史詩が不遇な境涯にある文人の自己表現の役割を固定的に荷ないつつあつた現象を示唆するようにも考えられる。

次いで陶淵明の「詠貧士」七首「詠二疏」一首などは、明らかに詠史詩の系譜に連なる作品である。「詠貧士」七首では、まず第一・二首に淵明自らが登場しており、第三首以後に登場する榮啓期・黔婁・袁安・張仲蔚・黃子廉等の古人は、それぞれ淵明自身の分身としての役割を果たしている。淵明が彼ら古人をどんな意識で取り上げたのか、それは次の句が自ずと示してくれている。

何を以てか吾が懐いを慰めん

古えより此の賢多きに頼る

(第二首)

ただし淵明は左思と同様に貧士を取り上げ、彼らを通じて自己の思想を反映させはするが、その思想はすでに左思と異質のものである。淵明は左思のように貧賤を人間としての恥と考え、何とかそれを振り捨てようと願う人ではない。彼は貧窮に生きる古人の像を跡づけつつ、貧士としての節義を貫いて生きようとする自己の生き方をひたすらに追求しているのである。淵明の場合は、彼が自己の人生を貧しく、誠實に、人間としての誇りを失わずに生きようと

左思と詠史詩(輿膳)

することが、すなわち汚濁した社會への逆説的批判となっている點に注目すべきである。

南朝の宋に入ると、詠史詩の系列に入る作品として顔延之の「五君詠」五首があげられる。この連作詩は、竹林七賢のうち高位に上つた山濤・王戎の二人を除く五人の賢者に對する憧憬を歌つた詩であるが、各々の詩が顔延之自身の自序的要素を多分にはらむことは、沈約の宋書以來久しく定説とされている。顔延之は時の權力者劉湛らを誹謗したことがもとで永嘉太守に左遷され、憤懣やるかたなくこの詩を作つたのだという。

彼の自序とされる詩句は、「鸞の翮は時に鍛がるる有るも、龍性は誰か能く馴らさん。」(嵇康)「物故論ずべからず、途窮まつて能く慟する無からんや。」(阮籍)「屢ば薦めらるるも官に入らず、一たび麾かれて乃ち出て守る。」(阮咸)「精を韜して日びに沈飲す、誰か荒宴に非ざるを知らんや。」(劉伶)である。顔延之は大酒飲みで、禮節にとらわれぬ放誕な生活を送つた人だといわれるから、竹林の賢者たちは自己の影像として蓋しかつこうの素材だ

つたわけである。彼は寒門出身ではないが、官途での昇進に大きな不満を抱いていたことはこの詩の成立過程が物語る通りであり、また竹林の七賢から、高官であつた山濤・王戎の二人が除外されていることも彼の立場を裏付けている。古人のイメージを通した自己主張は、顔延之において露骨なまでに顯著である。

左思の詠史詩の系譜をたどつてくると、宋代ではいま一人重要な役割を果す人物に逢着する。すなわち鮑照、字は明遠、がその人である。彼が寒門の出であることはすでによく知られているが、文選が収めるその詠史詩一首こそは、彼が左思の慷慨の最も忠實な繼承者であることを證明している。

五都矜財雄	五都	財雄に矜り
三川養聲利	三川	聲利を養う
百金不市死	百金	市に死せず
明經有高位	明經	高位有り
京城十二衢	京城	十二衢
飛甍各鱗次	飛甍	各の鱗のごとく次ぶ

仕子影華纓	仕子	華纓を影ばし
遊客竦輕轡	遊客	輕轡を竦ぐ
明星晨未稀	明星	晨に未だ稀ならざるに
軒蓋已雲至	軒蓋	已に雲のごとく至る
賓御紛颯沓	賓御	紛として颯沓たり
鞍馬光照地	鞍馬	光 地を照す
寒暑在一時	寒暑	一時に在り
繁華及春媚	繁華	春に及びて媚し
君平獨寂寞	君平	獨り寂寞として
身世兩相棄	身と世	と兩つながら相い棄つ

全篇ほとんどの敘述が都市の繁華とそこにうごめく富貴の人々の生態に費やされている。左思の詠史詩にこのような描寫がしばしば見られることは、先に言及した通りである。しかし鮑照は富貴の人々の豪華な生活と交錯させながら、胸中の思いを吐きだすに左思ほど急ではない。彼はつとめて批判を控えめにしながら、倦むことなく繁華の様相を極めつくし、ようやく最後の聯に至つて、ぽつりと一言つぶやくように全く異質のイメージを配合している。嚴君

平は世間のはなやぎをよそに、ひつそりと彼一個の世界に潜んでいる。彼は世間に關心を持たないし、世間もまた彼の存在を忘れてゐる。最後の句「身と世と兩つながら相い棄つ」の心ばえは、李白が古風其十三で「君平は既に世を棄て、世も亦た君平を棄つ」という通りであろう。世間からとり残された寒士たる自分の姿を嚴君平に託しながら、自分もまた世間を棄てたのだと歌つたのは、蓋し鮑照の矜持のしわざである。思想的傾向としては、左思詠史詩の最後の一首に近いといえよう。

鮑照もまた左思に劣らず自己の才能に充分な自信を抱き、家門の卑しさの故に空しく埋もれてゆくことを恐れた人であつた。南史（臨川王道規傳附）には彼の人柄を忍ばせる次のような逸話が記されている。鮑照ははじめ臨川王劉義慶に謁見したとき、志を述べた詩を獻じようとした。ある人が「君は下つばのくせにそんな輕はずみをして王のご機嫌をそこねるものじやない」と注意すると、彼は顔色を變えていつた。「千載の上、英才異士の沈没して聞えざる者有るは、安んぞ敷う可けんや。大丈夫豈に遂に智能を藪み、

蘭と艾よもぎとをして辨せず、終日碌碌として燕雀と相い隨わしむる可けんや。」

自分の才能に充分な確信があつただけに、世に容れられぬことを悟つたときの悲しみもまた大きかつた。

古えより聖賢は盡く貧賤なり

何ぞ況んや我輩の孤にして且つ直なるをや

（擬行路難其六）

斯波博士は右の句を據り所に、左思には見られなかつた鮑照の生き方として、自己の性格を顧みてやるせない孤獨感を慰める態度をあげておられる。（「中國文學における孤獨感」）

ところで鮑照の文學がその一面として左思の文學の忠實な繼承者であるのは、鮑照が出身階級と境涯の近さという點で左思になみなみならぬ親しみを寄せていたことが大きな要因としてあつたとみてよさそうである。詩品の鮑令暉（鮑照の妹）・韓蘭英詩評に見える次の逸話はまさにそれを裏付ける資料である。

「照嘗て孝武に答えて云う、『臣の妹（令暉）は自ら左、

芥に乘ぐも、臣の才は太沖に及ばざるのみ』と。」

鮑照の妹鮑令暉は文章の才を以て知られ、その「香茗賦集」は世に行われたという。彼女も恐らく後宮に仕える女性の一入だつたと想像され、上の鮑照のことばは左思・左棻兄妹の境涯が自分たち兄妹のそれに酷似することを意識した上でのものといえる。胡應麟が左思兄妹の容貌醜惡を論じた後で、鮑照兄妹を「絶えて對と作す可し」といつているのは、二組の兄妹の間に容貌の面までの相似性を考えたのであろうか。（詩數外篇卷二自注）

鮑照が左思から受けた影響は、彼の他の作品の中でもいくつか指摘することができる。彼が吳の名勝瓜步山を訪れたときの文章「瓜步山揭文」の一節もその一つである。

「瓜步山なる者は、亦た江中の眇たる小山なり。徒だ廻かなるところに因りて高しと爲し、絶しきところに據りて雄しと作すを以て、清を凌ぎ遠を瞰し、奇を擅にして秀を含む。是れ亦た居勢の之を使って然らしむるなり。故に才の多少は、勢の多少に如かざること遠し。」

鮑照はここで瓜步山をとりまく自然を美の對象として鑑

賞するのでなく、人間社會の不平等の象徴として見ているのである。これはあの「山上の苗」が「澗底の松」をおおいかくす情景の中に「世胄は高位を躡み、英賢は下僚に沈む」階級社會の矛盾を象徴させた左思の發想そのものではないか。鮑照は瓜步山の姿を眺めやりながら、左思の詩の一節をゆくりなくも思い浮べたのであろう。

鮑照にはまた詠史詩の系列に入る詩として「蜀四賢詠」一首がある。蜀の四賢とはつまり嚴君平・司馬相如・王褒・揚雄の四人であり、この四人を一組として描くことが左思の蜀都賦にはじまる點についてはすでに第五章で述べた。（三九ページ参照）さらに細かい穿鑿を加えるなら、「四賢」の語は詠史詩第七首の「四賢豈不偉、遺烈光篇籍」あたりを意識していたのかもしれない。

鮑照以後の六朝文學ないし唐代文學が左思の詠史詩をいかに繼承していつたかについては、私はなお考察の對象とすべき十分な材料を持ち合わせておらず、いずれ他日を期して改めて論ずるほかはない。ただ一言だけつけ加えておくなら、伊藤正文氏の「盛唐詩人と前代の詩人（上）」（中

國文學報第八冊)によると、唐人が左思について論ずることはあまり多くないようであり、「杜甫ほどの人も、左思に關しては一言も言及がない」ということである。しかし左思の文學について直接の言及は別として、初唐四傑の一人盧照隣には、左思のスタイルにならった「詠史」四首があり、第一首では季布、第二首では郭太(林宗)、第三首では鄭太、第四首では朱雲と、四人の前後漢の人物がそれぞれ題材とされている。幽憂子盧照隣は、人も知る貧苦と業病の果てに、自ら命を斷つた詩人である。また陳子昂の「感遇」三十八首や李白の「古風」五十九首の中のある篇や、杜甫が秦州時代に作つたと思われる「遣興」五首において、古人のイメージを通して思想が展開される技法が左思の詠史詩を多少とも考慮に入れなかつたものかどうか。後世の批評家は左思が李白に與えた影響の大きさをしばしば喧傳して次のように言う。

「太沖の詠史は、必らずしも専ら一人を咏い、専ら一事を咏わず。古人を咏いて己れの性情俱に見る。此れ千秋の絶唱なり。後、惟だ明遠と太白のみ之を能くす。」(沈德潛

左思と詠史詩(興膳)

「古詩源」卷七)

「太沖の詠史八篇は、千秋の絶唱なり。其の原は魏武に出ず。明遠は近く師とし、太白は遠く效う。」(陳祚明「采菽堂古詩選」卷十一)

「左思は晉詩中、傑出せる者にして、太白は多く之に學ぶ。」(何焯「義門讀書記」)

こうした言及は、いづれ李白の全詩について慎重に吟味検討されねばなるまい。

注

① 北堂書鈔卷一百十九武功部禦邊引左思詠史詩云、梁習仕魏郎、秦兵不敢出、李牧爲趙將、疆場得清謐、

② 潘岳の詩における對句については、高橋和巳氏の「潘岳論」(中國文學報第七冊所收)に詳しい論述がある。

③ 太沖一代偉人、胸次浩落、灑然流詠、似孟德而加以流麗、倣子建而獨能簡貴、創成一體、垂式千秋、其雄在才、而其高在志、有其才而無其志、語必虛僞、有其志而無其才、音難頓挫、鍾嶸以爲野於陸機、悲哉、彼安知太沖之陶乎漢魏、化乎矩度哉、(陳祚明「采菽堂古詩選」卷十一)

鍾嶸評左詩、謂野於陸機、而深於潘岳、此不知太沖者也、太沖胸次高曠、而筆力又復雄邁、陶冶漢魏、自製偉詞、故是一代作手、豈潘陸輩所能比埒、(沈德潛「古詩源」卷七)

また明の鍾惺・譚元春の「古詩歸」も左思を高く評價し、潘陸はおのおの一首ずつを選ぶだけなのと對照的に、左思は五首（詠史詩・招隱詩各二首、嬌女詩一首）を収めている。

鍾云、太冲筆舌靈動、遠出潘陸上、使潘陸作三都賦、有其材、決不能有其情思、（卷八）

④ 曹植精微篇第二章、太倉令有罪、遠徵當就拘、自悲居無男、禍至無與俱、緹縈痛父言、荷擔西上書、盤桓北闕下、泣淚何遑如、乞得並姊弟、沒身贖父軀、漢文感其義、肉刑法用除、其父得以免。辯義在列圖、多男亦何爲、一女足成居、

⑤ 此詩乃建安二十年、從征張魯、至關中、過秦穆公墓、與王粲同作、若黃初時作、則粲已早卒、恐轉涉附會也、（曹集考異）

⑥ 阮瑀詠史詩第二首、燕丹養勇士、荆軻爲上賓、圖擢盡匕首、長驅西入秦、素車駕白馬、相送易水津、漸離擊筑歌、悲聲感路人、舉坐同咨嗟、歎聲若青雲、

⑦ 清の沈德潛もこのことを指摘して次のようにいう。

太冲詠史、不必專咏一人、專咏一事、咏古人而已之性情俱見、此千秋絕唱也、後惟明遠太白能之、（「古詩源」卷七）

⑧ 郭璞の遊仙詩に寒士の慷慨がしばしば見られることについては、拙稿「詩人としての郭璞」（中國文學報第十九冊）参照。

⑨ 晉書劉毅傳、毅以魏立九品、權時之制、未見得人、而有人損、乃上疏曰、……今之中正、不精才實、務依黨利、不均稱尺、務隨愛憎、所欲與者、獲虛以成譽、所欲下者、吹毛以求疵、

高下逐強弱、是非由愛憎、隨世興衰、不顧才實、衰則削下、興則扶上、一人之身、旬日異狀、或以貨賂自通、或以計協登進、附託者必達、守道者困悴、無報於身、必見割奪、有私於己、必得其欲、是以上品無寒門、下品無勢族、暨時有之、皆曲有故、慢主罔時、實爲亂源、損政之道一也、

晉書段灼傳、今臺閣選舉、塗塞耳目、九品訪人、唯問中正、故據上品者、非公孫之子孫、則當塗之昆弟也、二者苟然、則華門蓬戶之俊、安得不有陸沈者哉、

⑩ 左思の父の名は晉書によれば左雍だが、一九三〇年に洛陽跡から発見された左思の妹左棻の墓誌によれば、名は熹、字は彥雅となつている。なお妹左棻の名も、晉書は芬に作る。参考のため、墓誌の全文を掲げておく。

左棻、字蘭芝、齊國臨菑人、晉武帝貴人也、永康元年三月十八日薨、四月廿五日葬峻陽陵西微道内、父熹、字彥雅、太原相戈陽太守、兄思、字泰冲、兄子鬣、字英髦、兄女芳、字惠方、兄女媛、字執素、兄子聰奇、字驪卿、奉貴人祭司、嫂翟氏、

晉書左思傳、父雍起小吏、以能擢授殿中侍御史、

⑪ 世説新語文學篇注引左思別傳、父雍起於筆札、多所掌練、晉書左貴嬪傳に「泰始八年拜修儀」とあるが、太平御覽卷百四十五の引く晉起居注によれば、左棻が修儀となつたのは咸寧三年（二七七）のことである。

⑫ 世説容止篇の引く裴啓の「語林」および晉書潘岳傳では、

左思ではなく張載のこととしている。

⑬ 夫蕭規曹隨、留侯畫策、陳平出奇、功若泰山、響若抵牾、雖其人之膽智哉、亦會其時之可爲也、故爲可爲於可爲之時則從、爲不可爲於不可爲之時則凶、若夫蘭生收功於章臺、四皓采榮於南山、公孫創業於金馬、驃騎發跡於祁連、司馬長卿竊質於卓氏、東方朔割炙於細君、僕誠不能與此數子並、故默然獨守吾太玄、

⑭ 阮瑀の作品については注⑤参照。

陶淵明詠荊軻詩、燕丹善養士、志在報強嬴、招集百夫良、歲暮得荊卿、君子死知己、提劍出燕京、素驥鳴廣陌、慷慨送我行、雄髮指危冠、猛氣衝長纓、飲饑易水上、四座列羣英、漸離擊悲筑、宋意唱高聲、蕭蕭哀風逝、淡淡寒波生、商音更流涕、羽奏壯士驚、心知去不歸、且有後世名、登車何時顧、飛蓋入秦庭、凌厲越萬里、逶迤過千城、圖窮事自至、豪主正怔營、惜哉劍術疎、奇功遂不成、其人雖已沒、千載有餘情、江淹別賦、乃有劍客慙恩、少年報士、韓國趙盾、吳宮燕市、割慈忍愛、離邦去里、瀝泣共訣、拔血相視、驅征馬而不顧、見行塵之時起、方銜感於一劍、非買價於泉裏、金石震而色變、骨肉悲而心死、

⑮ 二十四友に關しては晉書賈謐傳・劉琨傳・石崇傳・潘岳傳などに記されているが、彼ら文人たちは權力者賈謐へのおもわくからメンバーに加わつたもののものであり、まとまつた文學集團として活動したかどうかは疑わしい。

左思と詠史詩（興膳）

⑯ 晉書裕紹傳、元康初、爲給事黃門侍郎、時侍中賈謐以外戚之寵、年少居位、潘岳・杜斌等皆附託焉、謐求交於紹、紹距而不答、及謐誅、紹時在省、以不阿比凶族、封戈陽子、

⑰ 二十四友の一人に列せられている陸機はのち趙王倫の下で相國參軍となり、賈謐一族の誅滅に一役買つている。これからみれば、彼と賈謐の親交はさして密接でもなく、また長續きもしなかつたものらしい。なおこのことに關しては、姜亮夫「陸平原年譜」（一九五七年、古典文學出版社）に考證がある。

⑱ 文心雕龍詮賦篇、觀夫荀結隱語、事數自環、宋發巧談、實始淫麗、枚乘兔園、舉要以會新、相如上林、繁類以成艷、賈誼鵬鳥、致辨於情理、子淵洞簫、窮變於聲貌、孟堅兩都、明約以雅瞻、張衡二京、迅發以宏富、子雲甘泉、構深璋之風、延壽靈光、含飛動之勢、凡此十家、並辭賦之英傑也、

沈約宋書謝靈運傳論、周室既衰、風流彌著、屈平・宋玉、導清源於前、賈誼・相如、振芳塵於後、英辭潤金石、高義薄雲天、自茲以降、情志愈廣、王褒劉向・楊・班・崔・蔡之徒、異軌同奔、遞相師祖、

⑲ 史記張儀列傳、張儀已學、而游說諸侯、嘗從楚相飲、已而楚相亡璧、門下意張儀、曰、儀貧無行、必此盜相君之璧、共執張儀、掠笞數百、不服醉之、其妻曰、嘻、子毋讀書游說、安得此辱乎、張儀謂其妻曰、視吾舌尚在不在、其妻笑曰、舌在也、儀曰、足矣、

史記范雎列傳、范雎者、魏人也、字叔、游說諸侯、欲事魏王、家貧無以自資、乃先事魏中大夫須賈、

⑳ 史記魏公子列傳、魏有隱士侯嬴、年七十、家貧、爲大梁夷門監者、公子聞之往請、欲厚遺之、不肯受、曰、臣脩身絮行數十年、終不以監門困故而受公子財、公子於是乃置酒、大會賓客、坐定、公子從車騎、虛左、自迎夷門侯生、侯生攝敝衣冠、直上載公子上坐不讓、公子執轡愈恭、

㉑ 三都賦序を書いた皇甫謐は、太康三年（二八二）に死んでいる。

㉒ 文選李善注ではこの詩の作られた動機を次のように説明し

ている。

沖于時賈充徵爲記室、不就、因感人年老、故作此詩、

しかし賈充はすでに太康三年（二八二）に死んでおり、賈謐が誅された後で齊王罔に徵されたとする左思の傳の記述とも矛盾する。今は一應左思が齊王罔の記室督を固辭した當時の詩として考えることにする。

㉓ 張協の生涯と詩については、一海知義氏の論文「西晉の詩人張協について」（中國文學報第七冊）に詳しい。

㉔ 詩品は淵明に與えた左思の影響について次のようにいう。其源出于應璩、又協左思風力、（中品宋徵士陶潛詩評）